

包圍隊形

百七十一
擧つて第一線となり、漸次に包圍の隊形を取つたから、敵は右に撃ち、左に逆へ、中堅破

内野少佐

るれば左右に開くの状で、各個々に撃破せられた爲、勢ひ退却せざるを得無かつた。
最後の陣地へ到着する前、予は軍旗を奉じて、高梁畑を驅けてゐたが、丁度其處で内野少佐に邂逅つた。慧眼集鷹の如く、頬骨高く張れる少佐は、軍刀を杖つて岩角に立つてゐた。内野少佐とは出征前まで同じ聯隊本部で職務を執つてゐて、予は最も多く其感化を受けた一人であつた。少佐の明快なる戰術上の意見と、確乎不拔の精神と、又た磊々犯すべからざる風采とは、予の最も欽慕する所であつた。果せるかな、太白山攻撃の最苦戰中に、告別の辭を我聯隊長に送り、二個中隊の精銳を選つて、太白山の東北角に向つて率先突進し、先づ敵の頭上に二大痛棒を加へて、他隊の攻撃動作を容易ならしめたる神出鬼没の隊長である。今此の勇士と高梁畑で出逢つた時、相見ざる事既に久しかりし予は、昨日の少佐の武者振を想見したと共に、又た懐しさの情に堪へずして、「内野少佐感」と云つた。少佐は予を一瞥して唯だ「軍旗の光を掲げよ」と奨励の言葉を與へられた。予は覺えず感謝の低頭をなして、此際例の如くに少佐の壯快奇拔なる話を聞くの過も無く、今相見えて、乍ら永久の別となりぬべきは戰場の習なれば、予は纏綿たる名残を惜みつゝ更に

軍旗の光を掲げよ

前進した。

追ひ撃にする

此時敵は我が窮追に堪へ兼ねて、ジリ／＼後退をなし、遂には龍頭附近の最後の抵抗線を棄て、大孤山方面へ退却した。カウなると追討射撃だ。此程又た壯快なるものは無いので、遁げる後から追ひ撃ちにするのだから、敵は秋風に木の葉のバラ／＼と散るが如くに僵れた。かゝる愉快事たるや、大方は苦戰難關の後に得らるべき賜物なのであるが、今日は僅々三十餘名の死傷者を出しただけの戰鬪の後で、此の追討射撃となつたのである。かやうな事は又と望まざるべきものでは無かつた。

本防禦線を見

此日正午、我軍は全く豫定の陣地を占領して、北は土城子南方一帯の高地より、南は大孤山東方高地に至るまでを包有する事が出来た。而して今此の占領陣地に立つて、雙眼鏡を手にすれば、レンズに映じた所のものは果して奈何なる光景であつたらうか？
寫し見る、難攻不落と誇りたる鐵圍の旅順要塞、其の本防禦線は綿々として、南は鷄冠山より起つて、北、雲烟の間に連直し、見渡す限り砲臺ならざる無く、散兵濠ならざる無く、ニユツと頭を突き出して、虎豹の踞するが如く、今にも飛び懸らんずる勢を示してゐるものは、即ち重砲である。點々八重十重の線を曳いて、遠く霞めるものは即ち鐵條網

である。敵の斥候らしき者、又は展望哨らしき者も、點々此處彼處に見える。二十人三十人と圍つて鐵條網の作業をしてゐるのも見える。嗚呼之れぞ實に予等が最後の決戦地に非らずや！寤寐忘るゝ能はざりし槍舞臺では無きか！千秋の恨を吞んで「旅順が……」と云ひ、「仇を……」と叫んで絶命したる、彼の可憐の勇士等をして、今猶ほ生あつて、此光景を見るを得せしめたならば、其の喜びや那計りなりけん！予等は此日より、龍頭附近に滞留して、先づ敵の右翼前に蟻ゆる大小孤山を攻略したる後、之を攻撃の據點として、更に本防禦線の攻撃に着手せんが爲に、爰に干大山一帯の高地に沿うて堅固なる工事をしてゐた。

予は今茲に讀んで記す。畏くも 大元帥陛下は、七月二十六日より同三十日に亘れる戦鬪に對して、左の勅語を下し賜はり、微小なる予の如きも之れを捧讀するを得るの至大なる光榮を擲つた。

攻圍軍ハ旅順要塞ノ前進陣地ニ對シ、屢バ峻要ヲ冒シ、劇戰數日ニ亘リ、遂ニ敵ヲ其本防禦線内ニ撃退セリ。
朕深ク其勇武ヲ嘉ス。

聖勅下る

乃ち軍司令官は左の奉答文を捧げられた。

旅順要塞攻撃ノ準備戰ニ於ケル戰勝ニ對シ、特ニ優渥ナル勅語ヲ賜ヒ、感激ニ堪ヘズ。
臣等益々奮勵誓ツテ軍ノ任務ヲ達成センコトヲ期ス。

右謹ミテ奉答ス。

皇后陛下の
命令

皇后陛下よりは、又た次の命令を下賜せられた。

攻圍軍ハ旅順要塞ノ峻ヲ冒シ、連日猛擊漸次其功を奏スル趣、皇后陛下ノ懿聞ニ達シ、我將校下士卒ノ忠勇ナルヲ、深ク御感賞アラセラル。

軍司令官は乃ち又た此の命令に對して奉答文を捧げられた。微功だに無き草莽の卑臣、如何にして能く 震襟を安じ奉ることを得べきか。君恩の萬一に報せんこと甚だ難し。

連日の劇戰も何かある。然るに畏くも優渥なる勅語命令を拜するに至つては、予等唯だ恐懼慚愧禁する能はず。誰か垂慮の深大仁慈なるに感激せざりしぞ？幾多の忠勇なる陣歿將卒も、若し靈あらば、地下に之れを拜して感涙を滂ぎしならん。

聖勅下れり。將卒爲に感奮し、志氣愈々旺盛なり。峻嶮前に横たはり、勁敵之れを守るとも、我大君の爲ならば、いかで之れを破つて、敵慮を安んじ奉らざるべきや！

將卒感奮

第二十二 大孤山の攻畧

(其一) 絶體絶命

大孤山の地

旅順要塞の東海岸に方り、突元として天空を衝き、其形や岬々として、恰も鐵を削れるが如く、點々矮樹を以て蔽はれ、巉巖層々相重なりて崛起し、遠く之を望めば老虎の岬を負うて踞するに似たるもの、之れ即ち大孤山にして、其の南に連りて、近く嶗嶗砲臺と相對せるもの、即ち小孤山である。大孤山は標高百八十八米突の孤立せる山にして、其の西南面は旅順の諸要塞を俯視し、北西面は我左縦隊及び中央縦隊の包圍線内を瞰下し、攻圍の作業、各隊の行動、放列の位置等一々之れを目睫の間に收むる事が出来る。而して我に面せる斜面は殊に巉巖絶壁の險を成して、殆んど攀登すべからず。恰も曇日の劍山、太白山に對せし形勢に似てゐた。大小孤山は如斯くに敵味方の陣地を瞰視すると同時に、又た兩陣地の目標線より免かるゝこと能はざるものであつた。我が師團長閣下は大孤山を評して斯く言はれたことがある。

「大小孤山は夫れ鷄肋の如きか。之を敵の手中に委せば、我陣地を瞰射せらるゝの不利あり。之を手中に收むれば、敵より仰射せらるゝの危険あり。取るに難くして、棄つるは惜し。」

攻守共に難し

實に險要斯の如き陣地、之れを抜くこと固より容易ならざるのみならず、幸に萬難を排して之を占領し得るとも、此陣地は、附近に基峙せる敵の各砲臺より砲火を集中せらるべき地點なるを以て、之を維持するの難きは、之れを奪ふの難さよりも更に難きものあるべし。されば帷幄の議は、地形上戰略上、夙に之れを攻略するの必要を認めて居たが、只だ時機の到來するを待ち、敵の砲撃の絶ゆること無かりし間を、忍びに忍びて唯の一發も應射せず、専ら内部の攻圍作業を急いで居た。

前進攻撃

八月七日に至りて、愈々前進攻撃と決定せられた。我が野戰砲兵及び攻城砲兵即ち榴彈砲及び臼砲を有する一隊は、既に是れまでに敵に秘して、其陣地を構成して居た。それで此日午後四時頃大小孤山一帯の險線を目標として一時に砲門を開いた。砲聲殷々として白煙渦巻き揚り、高く天空に漲るや否や、大小孤山の敵壘は素より、後方なる盤龍山、鷄冠山より嶗嶗嘴に至る迄の各砲臺は齊しく起ち、砲火を以て我に應じた。見渡す限り一面は、乍ち漠々たる硝煙を以て掩はれ、百雷の一時に落つるが如き響は、暗淡たる空の、今

各砲臺齊しく起つ

我巨砲の効

にも雨と降り出さんずる重き空気に傳つて、ドロ／＼といふ音、暫時も止む事なかつた。殊に我砲彈が大孤山の岩角に突當るや、淡黄白色の閃光を放つて、岩を碎いて飛ばす、其の凄じさ、其の壯快なる、これが即ち戦争の一大壯觀といふのである。然れども敵の砲力の我れに優りしは素より、而かも嶮要を恃んで以て、我れを見下しに撃つのであつたから、我砲兵は非常の苦戦、そののみか非常の損害を蒙るのであつた。然し乍ら敵の砲兵は我谷底に配備したる臼砲及び榴彈砲の陣地を知らなかつたものゝ如く、専ら砲火を縦隊固有の砲兵及び我歩兵に集注したのであつたから、巨砲は一つも障害を受けず、日没に及んで其効果益す現はれ、大孤山の敵砲は爲に稍や沈黙したかの如くに見えた。而して我隊は、午後四時に至つて露營地を引拂つて前進し、砲兵の効果の現はるゝの時機に乘じて、大孤河を渡り攻撃に轉ずるの命令を受けてゐた。

予は今此激戦を記するに先だち、予自から此戦に臨まんとして、如何なる考をなし、また如何なる事をなしたか、それを少しく話したい。之も強ち予のみにあつた覺悟といふ譯では無く、戰闘前に於て、誰しもにあるべき事であつたから、耻暱しも厭はず、此に述べる次第である。予は五月二十四日に、足を遼東の地に入れて以來茲に三閱月、數ならぬ

戰死負傷の詭傳

身を以て 陛下の御身代、聯隊の魂たる軍旗を奉ずるの重任を負ひて、劍山に、太白山に、又た千大山に、硝煙彈雨の中に立ちし事、前後三回。然るに幸か不幸か、未だ微傷だに蒙らず、幾多の勇士は華々しく健氣に軍旗の下に斃れ、軍旗も亦た敵彈に劈かれて、尺寸の地に一兵の生命を奪ひたるに、抑も武運の拙さが故か、予は尚ほ全さを得たり。然るに此時既に予が戰死の報は連りに郷里に傳へられ、予が負傷の虚説も亦た新聞紙上に掲げられたのである。予は戰地に於ても亦た之を耳にした。其一説は、上陸の際風波劇烈なりしが爲、端舟は遂に轉覆して、身は狂瀾に巻き込まれ、口に軍旗を啣みて數町を泳ぎたれども、怒れる浪は遂に予を海底に葬つたと云ふ事。又た他の一説は、上陸後直ちに敵と衝突して、第一中隊長と共に戰死を遂げたと云ふ事。此の如き詭傳は、ありもせぬ予の手柄を吹聴してゐた。其後も受けもせぬ負傷の詳報が、屢ば一犬虚を吠えて、萬犬實を吠ゆると云ふが如くに傳へられてゐたが、己を省みれば、未だ寸功無く、又た寸疵無し。何たる腑甲斐無き事ぞ。予は斯く思ひつゝ、常に煩悶の情に堪へ無かつたのである。されば此度大孤山の戦にこそ、唯だ一死ある而已と覺悟し、攻撃の前日、從卒を招いて、あれもこの度こそは戰死と覺悟した。汝にはこれまで那計り世話になつたか知れぬ。あれが死んだと聞

唯一死ある而已

棺箱を造る

いたならば、それが汝に對する恩返しでもあるのだと思つてくれ。汝も亦た立派に戦をしてくれよと云つたれば、従卒は涙ぐみて、少尉殿が死なれるならば、私も死にますと、斯く健氣に答へてくれた。予は更に、あれは遺骨を納める箱を造つて置くから、あれの骨は其箱に納めてくれ。若し骨も取れ無い程立派に討死したなら、爪と髪とをあれだと思つてくれと云ひ終つて、彈藥を挾んであつた板片を集めて、従卒が削つた竹釘で打ち合はし、三寸角ほどの不恰好な小箱を造つて、其中に、爪と髪と、又た遺骨を包むべき半紙まで添へて容れた。箱の表面には姓名並に戒名を記した。最早予の入るべき棺箱は用意せられたのである。今は一死以て君恩に報ぜずんば、生きて何の面目かある。然るに予は遂に此箱に白骨を納むるの光榮を荷ふ能はずして、其箱徒らに嗤笑の種となるぞ、憾みなる。予は此夜一書を認め、東京なる家兄に寄せて戦況を報じ、且つ明日は愈よ攻撃に轉じて戦死と覚悟せり、身は旅順の鬼と消ゆるとも、魂は七生の忠を忘れざるべしとて、之を最後と信じたる暇を告げた。而して此日に又た予は實に家兄の書を得たので、其中には左の二句が記してあつた。

『名譽を思ふな、戦功を思ふな、唯だ汝の義務を守るべし。』

ネルソンの金言

『ネルソンがトラファルガーの海戦に名譽の戦死を遂ぐる時、告げて曰く、
"Thank God, I have done my duty."』

(天に謝す予は予の義務を盡したりと。)

予は將に進撃の第一歩に轉せんとして、實に此語を得た。而して予は之が爲に多大の激勵を得、一層の覺悟を新たにせられた。

大雨降る

時は是れ八月七日午後五時。大雨沛然として降り、砲聲は雷を成し、さらでだに暮れ行く空の淋しさは、更に暗淡として物凄く、迷霧咫尺を辨ずべからざるの天地となつた。其時予等は大孤河の前面丘阜に集合して、イザ前進せよとの命令の早からんことを待つてゐた。雨は益す降りしきり、空は眞の闇。時々照らす敵の探照燈は、山々谷々の半面を白く青く隈取つて、我歩兵の前進を阻害する。瞰制射撃の篠突く彈丸は、豪雨と混じて異響を傳へつゝ、刻一刻に烈しく注いだ。而して一枚の外套に包まれてゐた林少尉(辰巳)と予とは、時々思ひ出したやうに、語を交へるのであつた。

林少尉

『何時貴様と別れるかも知れぬぞ。』

林は何か覺悟のあるが如くに斯く改まつて云つた。予も亦た、

『おれも今夜こそは死ぬると決心した。』
林は更に、

『長く貴様と一所に暮したなア。』

最早餘言を交ふるの暇無く、林と予とは右と左に別れ無ければなら無くなつた。彼は手の親しき戦友で、故郷に在りし頃は、久しく寢食を共にしてゐた位の間柄であつたのだ。又た壘に太白山最後の突撃に、先づ劍を揮つて敵壘に躍り込んだ者は、實に此の林少尉であつた。而して今此の戰場にて右左に別れた其瞬間は、實に彼と我との最後の見納であつた。其握手は最後の訣別であつた。

濁流滔々

我砲兵は前述の如く、日没より追々に効果を奏したと見えたから、茲に我隊は愈も前進となつた。狂雨は益々劇しく、徑路は俄かに泥田と變じ、行進頗る惱みたれども、膝を没しつゝ、ツブツと前進した。然るに沈黙したと思ひの外、大孤山の敵砲は濛雨煙火の内、我前進を發見するや、一齊に砲火を放ちて其の勢を盛り返した。我等は強雨を冒し、彈雨に浴し乍ら前進して、大孤河に達したるに、濁流滔々として漲り溢れ、其の深さ幾尋なるや測り知るべからず。是を敵が此の猛雨を利用して、下流を堰止め、氾濫を作りて我が

死屍の橋梁

前進を阻止せんとしたのである。されば如何に我軍の剛勇と雖も、この障礙に對しては稍や躊躇せざるを得なかつた。敢て之れを冒さんか、乃ち彈丸に斃れずして、只だ溺死者を積重ねるのみであつた。然るに我工兵の決死隊は猛然として此濁流中に飛び込み、一舉に其の堰堤を破壊して氾濫を消決したから、見る／＼滔々たる流水は減退して、我兵の前進を許した。此に於て乎、全軍河に投じ、流を亂し、威を揮つて慕進した。されど敵砲は風雨と共に益々猛烈にして、中流に斃るゝもの算なく、死屍相重つて左右なく前進すべくもあらず。然るに我軍は死屍を橋梁となし、之れを踏み、之れを越えて、多大なる斃死部隊を残しつゝ、彼岸に達した。

更に隘あり

我隊は斯くして漸く大孤山の麓に達したるも、猶ほ是れよりは更に鐵條網を破壊し、地雷を踏み破らなければならなかつた。一險辛うじて過ぎて、直ちに又た他の危難あるの状であつた。されど今は一步も猶豫すべき時にあらざれば、岩を攀ち崖を辿つてシリ／＼と前進したが、一寸先きも見えぬ暗さと、益々狂ふ暴雨とは那計り苦しめられたことか。洪水を渡り強雨に浴した爲に、全身は水浸となりて、運動も任ならざりしのみか、漸次敵壘に近くに從ひ、敵は頭上より霰彈を注ぎ、岩石を擲げ、木材を投じて、我が躍進の困難

は實に言語道斷となつた。隣接隊は既に半腹なる馬蹄形の散兵隊に近づき、我隊も亦た山腹の岩石に漸く足場を止めて、此機に乗じて夜襲に轉せんと、これが準備をなして居た。されど敵は絶えず探照燈を照し、光弾を放つ等、凡そありとあらゆる方策を廻らして、我が攀登を妨げたるを以て、夜襲は到底不可能の事と決定せられて、此上は拂曉を待つて攻勢に轉することとなり、今夜は敵と睨合つたまゝ、小歇み無き雨に浴しつゝ天明の至るを待つて居た。

攀登を妨ぐ

傳令悉く斃る

天漸く白みたりと雖も、前夜來の雨は未だ休まず。顧みれば大孤河附近の一面には戦友の死屍散亂し、且つ敵の眼下に在ることなれば、之れを收容する事は、勿論河を隔て、對岸に傳令を派遣することも出来なかつた。それにも拘らず出かけた傳令は、餘さず敵陣に斃されてしまつた。此の悲惨なる光景、この遺憾なる情况の傷心の至りに堪へずと雖も今は殆ど策の施すべき無く、突撃の目的を成就せんことは、果して何れの時に在るかと思はざるを得なかつた。丁度大孤山の麓で倒れて居た飯野曹長は、腹部を貫通せられて悶え苦しみ、足掻きに足掻いて、傳令の通過する度毎に、手を合して、殺してくれ殺してくれと頼んで居たさうである。嗚呼今は如何にせばこれ等の勇士を慰むることを得べきか。意徒殺してくれ

敵艦十二隻

らに馳せて時機の未だ到らざりしを如何にせん。そのみか關廠附近にはノールウイタ以下十一隻の敵艦現はれ、背面より大小孤山に向へる我歩兵に對して、猛烈なる砲撃を加へたから、我兵は唯だ彼れの標的となつて、其の欲するがまゝに多くの生命を貢がざるを得ず、我を陰蔽すべき地物あるなく、唯だ無念の切齒をなして、睨んでゐたばかり、絶體絶命、前門に虎を助けば、後門に狼迫るの狀勢であつた。然るに我軍は遂に如何にして此の大孤山を攻略するを得たか？

第二十三 大孤山の攻畧

(三三) 山上の 日章旗

踏破容易に非ず

漢々たる砲煙は怒れる海に如く、濤々たる驟雨は狂へる獅に似たり。見あぐれば峻岳天際を摩して屹立し、木梢を傳ふ猿猴の巧も猶ほ攀づ可からず。一步を登れば一步は更に危く、一崖を攀づれば一岨は更に險し。而して今や猛鷲此の天險に據りて我を威す。大孤山頂には、八面よりする我が銃砲火集注し、之に對するに、彼の前面には巨砲の紅舌を吐いて、火煙簇り揚るあり、背面には鐵艦の波を蹴つて迫り來るあり。此の天險、此の鐵壁、而かも此の防備、我れの之を陥れんことは、蓋し容易の業では無かつた。されど不幸にして之を占有する能はざらんか、奮に我軍が旅順主要塞の攻撃の進歩の、茲に喰ひ止めらるゝのみならず、而かも其攻撃の據點を失ふべし。故に幾許大の犠牲も、又た幾許大の困難も、之を厭ふべき場合は無かつた。

旅團長の命令

威力の益す擴大せらるゝに至りたるより、此機逸すべからずとなつた。其時、旅團長からの左の命令に接した。

『左翼隊は今より大孤山に向つて突撃を實施する筈、其聯隊も之れと連撃して、北斜面に突撃せよ。』

兩翼並び起つ

此命令を受くると同時に、左翼隊長よりも左の通報を受けた。『我聯隊は損害の如何を顧みず、今より突撃を實行す。貴隊も共に此の名譽ある突撃を實施し、以て大孤山を占領せられんことを望む。』

此の大突撃命令が傳へらるゝや否や、兩翼並び起ち左右相應じ、我は鬼神の勇威を揮ひて、彼が魔王の怒嚇を意とせず。天險を犯し砲火を冒して、攻めかけ攻めかけ、乗り越え、乗り越え、賊聲轟々、砲聲殷々、劍尖閃き、砂塵舞ひ、鮮血流れ、肝膽塗れ、今や格闘大混戦！敵は山上の大石を捨がして轉々墜下せしめ、爲に千仞の溪谷へ跳ね飛ばさるゝものあれば、幾丈の岩石に壓潰さるゝものあり。肉破れ骨砕け、喚き叫ぶ聲、狂ひ猛る音、慘たる其光景や、實に此世の態とも覺えられ無かつた。鷄冠山及び二龍山より發射する重砲弾は、其命中を過たず、山上一連に爆發飛散し、榴彈、地雷彈の餘束は、東西に亂れ南北

軍旗を立つ

に引き通うた。然るに懸て萬歳の聲は、峯にも尾にも相應して、山も揺がんばかりに起つた。何事ぞ、何事の起りしぞ？見よ、濛々たる硝煙の間に翻翻たるは、我が日章旗に非ずや！予等は實に突撃を奏効した。軍旗は既に進んで、山頂の岩角に懸へれり。予等は之を見て喜び極まつて泣きたり、實に泣きたり。

百八十八

大孤山占領

淡灰色の硝煙に包まれたる大孤山は實に我有に歸した。されど此險要の一度我陣地の主點となりしや、敵の各要塞は、一齊に砲火を開いて、我が頭上に集注せしめた。水壘大の重砲は、汽車の唸るが如く、地鳴の如く、空氣に大波動を起して飛び來り、轟然爆裂するや、白煙の蒸すところ惟光、煌き、黒煙の起るところ岩石を砕く。地軸震駭し、死屍寸斷せらる。其形勢や頗る不穩、占領部隊は殆ど其位置を支ふるに難からんとし、剩さへ敵は必ず逆襲を計るべきも、我は山上に於て如何にして之を逆撃し得べかりしや。首を伸ばして敵の斜面を望まば、忽ち砲彈を見舞れるのだ。されば一歩も動くことが出来無かつた。唯だ只だ辛うじて石を積み岩を重ねて、我散兵線を強固ならしむるに努めたのみであつた。山巔に在つた野砲六門を捕獲したる後、之が監視として立つてゐた某兵卒は、敵の全彈を喰つて、見ん事チリリに引裂かれ、四大空に歸して、只だ僅かに残れる肉一片

敵の重砲

肉一片を残す

二十六人を粉砕す

のみ、予等の頭上を掠めて、後方の岩角にビシヤリと喰付いた。又た一砲彈は、我が密集部隊に落下して、一舉に二十六人を徹底に粉砕した。又た之が爲に崩壊したる岩石は、三人の者を生ながらに埋葬し了つた。

瀨川兄弟の哀別

茲に瀨川中尉(國男)は、此日敵彈の爲に腹部を貫通せられたが、此夕べ生命の既に殆く見えたるより、從卒など寄添ひて彼を介抱してゐた所へ、斯くあらんとは夢にも知らぬ其兄瀨川大尉(萬太郎)が、偶然此處に來たつて此由を聞き、弟氏が死出の旅路の別れに臨んで、末期の水を汲み玉へかして導かれて、大尉は靜かに弟に近づき、

「國男！……」

骨肉の聲が中尉の耳に響くと、兼て思ひ侘びてやありけん、苦しき息の其中に眼を見開き、微かに兄の顔を打守つて涙を淨べ、互に緊と手を握り、暫時は言葉も無かつた。懸て大尉は、

「國男！能くやつてくれた。何も言ふことは無いか……」

大尉は弟の顔を拭ひ、水筒の水を傾けて口に注ぎたれば、中尉は微かに打領さて、

「兄さん……」

百八十九

三兄弟國難に殉ず

これぞ彼が最後の別辭で、程無く黄泉の客となつた。噫、兄なる人の心の中や如何なりけん、側なる人々すら密かに哀しみの涙に咽びしものを。然るに之れより二週日の後、即ち八月廿四日の戦鬪に際し、瀬川大尉も亦た、愛する弟氏の跡を追うて、還らぬ人の數に入つた。而して此の二君の長兄たる瀬川布教師も亦た、此度の戦後中、病を以て戰場の煙と消えたのである。一家三兄弟悉く國難に殉ず、之を以て美事と云はんか。予は寧ろ天無情を訴へて、慘禍の其威を彼が一家に逞しうしたるを歎かざるを得無い。

本防禦線の骨子として頼んだ大孤山も亦た、日本軍の爲に奪略せられたので、敵は嗚かす無念と思つたであらう。されば如何にもして之を回復せんずと、絶えず逆襲を企て、押掛け押掛け攻撃して来たかなれど、我軍の堅忍なる逆襲は、常に彼等を失望の淵に沈ませるのであつた。恰も占領後數日なる天明の頃であつた。突然山上に在りたる我が監視兵の一名が、敵の斥候の爲に射殺するところとなつた。ヌヲ來たぞと、第二中隊は山頂に躍り上りたるに、眼下僅かに十數尺の地を、敵の將校が劍を揮ひ、七十餘名の雜兵を従へて登つて來るところであつた。何かは以て躊躇すべきや、乍ち猛烈なる急射撃を浴せた。彼等は事の餘りに急なりしに驚きたるならん、周章て狼狽し踵を返して轉ぶが如くに逃げ出し

ヌヲ來た！

露兵頑強の度

た。中隊は此の時こそと撃ちかければ、實に壯快！彼等を唯の一名も餘すこと無く悉く斃した。其の死骸はズラリと列んで、山腹の一面を黒く蔽うた。其時又た敵の優勢なる後續部隊は遙か小孤山に通ずる道路と、我れに通ずる道路との三又點に集合してゐた。多分兩方の山へ先遣隊を出して、効力のありさうな方へ、どちらへても急行して逆襲を試みんとするの計畧であつたらう、されど斯の如き股鞍膏藥主義は決して奏効するもので無い。

されど既に屢ば云へるが如くに、露兵の常に頑強なりし事は、往々我等を驚かしたのである。或る陣地を攻撃せられて、甲の地點が陥れば、乙の地點に在るものは、地形上退却をなさねば、只だ大死するか、捕虜となるか、二つに一の外途の無き場合ですら、彼等は決して退かぬ。生命を取らるゝ迄も、頑然として死守の態度を改めず、味方は自分唯一人となつても、矢張射撃を持續し、我兵が近づき追れば、銃劍を揮つて之に擬し、遂に降服するの考を出す迄は、敢然として黙つてゐるのであつた。是は劍山でも太白山でも、又た此の大孤山でも其例には乏しくなかつた。聞ならく、南山にては、我軍の占領後、何處とも無しに飛び來る敵弾に、意外の死傷者を生じて、其數十餘人に上つた。それで色々銃聲の來る方角を搜索した後、炊事場に隠れた敵兵僅かに一名が窓から銃を突出して、一

生懸命に射撃してゐたのを發見したと云ふ事であつた。捕虜に對し、何故汝等は頑強なるかと糾して見たれば、大抵の者は、

絶對的服従

『將校の命令だから止むを得無さ。』

と答へた。露兵は上官に對して、絶對的服従をなすものなる事は兼て聞いてゐたが、果して實戰に際して、彼等は絶對的服従をなし、死に至るまでも、其任務を忘れ無かつた。是れは由來、露國軍隊の將校と下士卒との關係が、中世紀に於ける貴族と平民との間柄の如きものであるから、自然斯の如き氣風を生じてゐるのであらう。而して日本軍隊の上下互に親和し、赤心を擧げて服従するの精神とは、其の由つて來る所を全く異にしてゐる。英國の一將軍で、數ヶ月の間、我が滿洲軍に従軍してゐた人が、日本軍隊の最特色、最美點として賞讃すべきは、其上下の親睦融和せる事であつて、如斯きは他國の軍隊に於て決して見るべからず、英國と云ひ、又た彼の平民主義なる米國に於てすらも望むべからざる事であると言つたと聞いた。我軍隊の強味は蓋し此特色から結果してをると稱すべきか。然し乍ら露兵の頑強、之れは確に悔るべからざる美風で、彼等が旅順要塞に籠城して、糧食彈藥共に缺乏を來たし、幾多の生命は奪はれて、恰も風前の燈火に異ならざる窮境に陥

敬服すべし

つても、殆ど少しも其態度を改めず、頑然として孤城落日の悲運を墨守してゐたるは、即ち彼等の特質たる頑強の精神に外ならぬのであつた。平素彼等は如何なる精神教育と、如何なる訓練の下とに養成せられてゐたか。彼國の讀法の一節には、

『戰勝の月桂冠は、銃劍と賊聲と以て贏ち得らるべし。汝等にして彈丸盡ぐれば、銃床を以て敵を打撃せよ。銃床折れば、齒を以て噛むべし。』

と教へてある。之に由つて考へても、彼の氣風の發展は蓋し頗る故あるては無いか。露兵は實に頑強であつた。されど彼等は又た非常に命惜みであつた。此の兩特色は大に矛盾してゐる。されど死と成りて存すとも、玉と成つて碎くるを厭ふは、實に彼等の主義であつたやうだ。或る捕虜の如きは斯う云つたやうである。

非常の命惜み

『予には最愛の妻あり。彼女は那計りか予の身を憂慮してゐるならん。我が將校は、日本軍は塑像の如くに脆しと云つた。然るに何ぞ計らん、彼等が鬼神の如くならんとは。戰つて生命を犠牲とせんよりは、予は我妻の爲に之れを惜まざるべからず。我れ死せば、最愛の妻は那計りか歎き悲しむべし、彼女は狂せん。予は到底日本軍に敵し得ず。日本軍に屠らるゝを知りつゝ、戰ふは愚の極である。』

死の榮あつて生くるの辱無しと信ずる日本男兒の膽と、彼等の精神とは、實に霄壤の差あるもので無いか。

予等は此の守るに難き大孤山を警戒して、幸に毎も敵の逆襲を撃退した。それで敵も終には回復の念を絶ちしか、ひたすら本防禦線の工事を彌が上にも強固ならしむるに努め、又た各砲臺の重砲を以て、絶えず我軍の攻圍作業を妨害してゐた。而して同時に我部隊にあつては、大孤山を蔭蔽して、着々攻城材料を集め、重砲陣地を堅固に構成し、又た常に有力なる斥候を派遣して、地雷の位置、鐵條網の強弱、行進地區の敵陣に對する効力等、其他凡ての事柄に就いて、攻撃地帯の偵察に従事してゐたが、其の諸準備も全く整頓するを告ぐるや、遂に八月十九日を以て、第一回の總攻撃に轉ずる事となり、予等は重要なる目標として、東鷄冠山砲臺を與へられた。此度こそ旅順の死命を制すべきの時なればとて、我軍は最も慎重なる態度を以て、最も精密に攻勢に轉ずるの計畫を立てゝゐたのである。

第二十四 戦場の訣別

陛下馬前の塵と、兼て思ひ定めたる征勝の旅にしなければ、いでや死せん我茲に立てりと、心は逸りたれども命の未だ至らざりしを奈何にせん。故郷を去つてより既に百有餘日、故山の百花我が戎衣に薫じ、春風軽く征旗を吹いて、我れを雲霧万里の異郷に送りしより、日月速かに流れて、今ぞ青葉の蔭に鎧の袖を片敷く。戈を枕の夕べにも、矢玉の霰降りしく屢にも、忘れぬものは、一死 皇恩に報せんと欲するの念なれども、時は未だ我に満たず。幾千の戦友が無念の精靈は、さこそ行くべき空知らず、冥途の鬼と迷ふらめ。イザ弔ひ戦して彼等を慰め、我も亦た彼等が跡を追はんものぞと思へども、嗚呼時の至らぬを奈何にかせん。肉塊骨片の腥さが中に、なほ生を保てるものは、肉落ち骨瘦せて、心ばかりは鋭き餓鬼の一群ぞ。さりとて我等も亦た大和櫻の根分ぞや。何事ぞ、一戦二戦、否、三四戦、猶ほ未だ戦場の花と散つて、原頭に屍を曝らざる！大孤山こそ、我が討死の草庭なれと覺悟しながらも、遂に幾多の戦友に離れて残す所となりぬ。いで此度の總攻撃を

そ、我が死すべき晴の戦なれと思ひ定めて、予は出て立つた。

予は八月初旬に中尉に昇進したことが、此時に至つて通達せられた。青木聯隊長は予を呼びて、いと厳かに、

「昇進を祝す。中尉は出征以來、軍旗を奉じて戦闘せり。今や其職を解くと雖も、更に努めよ。總攻撃は愈よ明日と決定せり。予は中尉と親しく寢食を共にしたり。今別るゝに忍びず、然れども予は君の成功を思つて茲に訣別す。」

親しき聯隊長

と言はれた。實に予は出征以來、聯隊長と共に寝ね共に食ひ、常に其膝下に在つて戦闘したのであつた。露繁き原頭の野營には、隊長は藎を分つて予をして夢を結ばしめられた。乏しき食物も、予に分ち與へて、樂しき家庭の團樂に、共に箸を取らるゝが如くに微笑まされてゐた。予は常に思つてゐた、我が聯隊長は、昨日まで暖き蔭に樂しき夢を結ばれた身で、今日は荒野が原の狎れぬ草枕に、若しや恙のありはせぬかと。三千の生命を握れる聯隊長の一身は、千鈞の重さにも勝りて尊きものぞ。聯隊長の志氣の振衰は、隊長の健康に依ること多きものなれば、予は思ひの丈の万一をも成し難き戰場なれど、猶ほ出來得る限りの心を盡くして、聯隊長に仕へてゐた。曩に張家屯に在りて、出征以來初めて水盥に湯を

軍旗と隊長とに別る

沸かして入浴を勧めた時、青木大佐が心から喜ばれた其顔色は、今も猶ほ目に浮ぶやうである。斯く親とも頼める隊長の許を離れなければならぬ事となつた予が、當時の心の辛さは如何であつたらうか？素より部下を去る譯では無く、其中隊に屬してゐるのだから、眞の別れでは無かつたけれど、何と無く之が遠くへ別れ行くものゝやうな感じがした。予は聯隊長の此言葉を聞くと、涙が喉を堰いて、暫時は頭を掻き兼ねた。また昨日まで砲煙彈雨の裡に奉げたる軍旗と永別せねばならぬ事の心苦しさを、聯隊長の左側に懸れる、色褪せ且つは裂け破れたる軍旗を拜すれば、同じく此の旗風に競ふ三千の將卒中、予たるもの豈に聊か他に異りたる思ひの之に添はずしてあるべきや。

從卒に別る

軍旗と聯隊長との身邊を離るゝが悲しさに、予は暫く頭を垂れて思ひに沈み、青木大佐も亦た、盡さぬ名残を惜まれてゐたが、斯くてあるべきにあらねば、予は容を正して、『聯隊長殿、屹度立派な職をして、御覽に入れます…』
予は最早他に何事をも語り得ず、徐に踵を廻らして一步二歩、やがては急ぎ足に、從卒の側へ來た。予は從卒に向ひ、
『あれは今から中隊へ行くことになつた。それで汝は交代せねばならぬ。あれは決して汝

の恩を忘れぬぞ。汝も亦た何の世までも、あれを眞の兄だと思つてくれ……最早何も言へぬ。立派な戦士としてくれ……」

從卒高尾文吉、彼は男泣きに泣いて、予と別るゝ事はドツあつても出来ぬと云つたが、それは止むを得ぬ。汝は能く上官の命令を守つて、人に引を取らぬやうにせよ。大孤山の戦の前に、汝と共に造つた棺箱は、いよく今度は役に立つ事となつたぞと、斯く予は彼を慰めまた贈してゐたが、予も彼と別るゝ事の悲しさに、胸は裂け破れんばかり。彼も亦た溢るゝ涙壺を敢へず、

「中尉殿、私を弟と思つて下さるか？」

彼は泣きぬ、予も亦た泣きぬ。今茲にて別るとも、再び逢ふ事はありぬべし、死なば諸共に盡させぬ榮譽を荷うて、彼の空に昔を語ることもやあらん。イザ行かんと予は思ひ切つて去らんとすれば、彼は予が戎衣の塵を拂ひ、脚絆の紐を締め直して、「中尉殿、それでは……」と云つたが、最早予を見るに堪へずやありけん、其顔を蔽うて背けた。予は、「高尾！平素言ひ聞かした事を忘れなよ」と云ひ棄てて、遙かに遠き第三大隊の位置に赴かんとして歩み去つた。

互に泣く

松岡大尉

予は軍旗に別れ、聯隊長に別れ、又た從卒に別れて、孤り淋しく野原を過ぎりつゝ、今は親しかりし戦友の墳墓の地となる山谷を望み、情無き空の雲を仰ぎて、斷腸の思に堪へ兼ねてゐたが、不圖心に浮んだは、安井軍醫に會ふ事と、同郷の先輩松岡大尉（正彰）に別るゝことゝあつた。それで直ちに塵を轉じ、遠く數丁の道を迂回して、先づ大孤山北麓の地際に、松岡大尉を訪ねた。大尉は一枚の天幕の下に孤坐してあつたが、予の到るを見て、喜び迎へつゝ、

「暫く逢は無かつたが、機嫌であつたか？」

「御陰で中尉に昇進しました。此度は第三大隊へ往く事になりました。何分よろしく。」

大尉は何思ひけん、

今世の別ぞ

「それでは今日が、君と今世の別れだ！」

予も亦た、大尉殿とは是が生別れなり、御互に鶏冠山の絶頂に白骨を晒しませうなどと、語りて後、それでは御別れと云ひながら立ち上つた時、大尉は予の肩を叩いて、

「その腰の物は何か？」

予は微笑に笑つて、

『私の棺桶です。』

『ハア、用意が早いね。』

之れを別の言葉と残して、予は地際を出たが、思へば此時こそ實に大尉との生別であり又た死別であつた。それより予は鞠家市附近の岩陰にあつた第一大隊本部を尋ねて、安井軍醫に會つた。到着すると間もなく、一二發の砲彈が凄じき音をして、幕舎の前に落ち來つた。續いて四發五發。されど之に馴れたる予等は格別意にも留め無かつた。聞けば此の位置は、砲彈の御見舞の頻繁なる處であつた。予は大隊長が、大孤山の戦場に微傷を負はれたと聞いてゐたから其見舞を述べ、且つは昇進の挨拶をした。其後、安井軍醫は予を砲臺の側へ招いて、暫く會は無かつた。同じ戦場に在りながら膝を交へて語らうべき折も無く、高粱を吹く風にも、夕暮の空飛ぶ鴉にも、若しや君の音信やあると、思ひ侘びてゐたとの情ある言葉、予も、今迄御互に無事であつたは實に不思議だ。されど此度の戦は、素より萬死を期してゐる。最早明日をも知らぬ命の露の間だに、一度君に逢ひて、死出の旅路の別を告げんと思つて、斯くは廻つて來た。會て黄泥川の被家て盟つた事は、既に目前に迫り來つた。共に斃るれば其れ迄だが、君に若し命があるなら、血に染める予の軍衣を

安井軍醫と
訣別

切つて片身となせよ。是を實に君と我れてふ契違からぬ友が、今生の永別なるとして手を握りめめ、互ひに功名手柄を祈るぞと言ひ交して、盡きぬ名残の涙の中に、右と左とに立ち別れた。恁て互ひに見返りながら、予は此天幕を辭して、大孤河を渡り、要塞に面する方の斜面を攀ぢて、旅團司令部に到り、少將閣下に挨拶を述べたる後、第一大隊本部に着いた。恰も其時副官が病氣で一時静養中であつたから、予は代つて其任に當ることになつたが、暫して後、第十二中隊に付いた。

いよく攻撃の始まる十九日の前夜に、予は炊事當番が持つて來た二通の郵便を受取つた。郵便が此のやうな場合、このやうな場處に來る筈は無論無いのであつたが、不思議にも只だ此の二通だけが、彼方此方に傳はり傳はつて、予の手に届いたのであつた。此等は家兄より寄せ來たつたもので、其一は萬年筆を封入したもの、他は二人の姪女の寫眞で、姉は四歳、妹は三歳、其可愛い顔が、「叔父さん」と呼ばんとするものゝ如くに、予の目に映じた。されど寫眞の二見の影も心あらば、予の憔悴せる姿を見て、恐らく泣き出したであらう。朝な夕なに只だ見るものは、むくつけき戦友ならずば、裂けたる肉か、碎けたる骨。會て草間に笑ひし花も、今は踏み躪られて見る影も無き此戰場、而も攻撃の前夜と云

二姪の寫眞
來る

二姪を抱いて戦はん

山本武敏の絶筆

ふに、俄に二姪の來臨を得たることの那計り予の荒ぶれたる心を慰めしど、如何に嬉しかりしぞ！予は其愛くるしき眼元口元に接吻するを禁じ敢へず、又た、『母の膝下を離れて遠く萬里の波を渡り、硝煙陣雨の此の戰場に來りし事の健氣さよ。叔父は汝等を伴ひて、明日よりの劇戦に敵の首を取らせんぞ！』と口吟んだ。此夜硝煙沈んで、星斗爛たり、予は陣中に二姪を抱いて眠り、又た此夜は殊更に、彼のネルソンが絶命の辭の思ひ出でられ、且つは出征に臨んで、殿父に書き残したる、『獨體之榮、七生之忠』の二句を繰返した。獨體を原頭に晒して、七生の忠鬼とならんことは、明日か明後日か、我が時は將に満たんとせり！當時山本武敏なる上等兵があつた。彼は爪と髪とを切りて母兄に贈り、添ふるに辭世一首と左の遺書とを以てした。それを實に彼れ武敏が絶筆であつた。『私も最早是迄に二回決死隊に参加致し候へ共、矢張笠の臺を保持し居り候。誠に戰友に對しても氣の毒千萬の至りに御座候。塵に先發隊として出征したるもの、我中隊に於て二百二十一名も有之候ひしが、今残りたる健康者は僅に二十名に候。幸か不幸か自分も其中に列し、實に萬死の一生に數へられ居り候。然れ共人世僅か五十年、早く捨てされ

ば捨所なし、何れ一度は捨つる命、死と成りて存せんよりは、玉と爲りて碎けん覺悟……彈が來ようが突かれうが、命さへ無きや死にはせぬ。右の戰友は彈を浴び、左の士官は砲彈で大股前胸空に飛び、中に立ちたる此身には玉も當らず、怪我も無く、之は不思議と、我身をば抓つて見れば痛を感ず、矢張生ては居るらしい。未だ死ぬ時は來らぬかと思ひ定めて勵みを付け、偕之から敵打ち、遺恨重なる露スキーム、今に目に物見せてやると、矢竹にはやる心にも、思へば果敢なき身の素性、土百姓の我々が、茅屋繩座の上に於て空しく屍を埋没せんよりは、花々しくも今茲に名譽の戦死を遂たなら、花は櫻と謠はれん……

大元帥陛下萬歲くく

故陸軍歩兵上等兵 山本武敏

彼は自から我名に『故』の字を冠し、また從容笑つて死地に入るの覺悟が紙面に横溢してゐる。されど蓋し如斯きは、當時に於ける將卒の悉く皆懷持してゐた決心であつた。山本は予等の胸中を頗る率直に代辯したものである。

第二十五 總攻撃の端緒

二百四

猛鷲の巢

ノウエ、ウレミヤの通信員は、旅順の防備を視察して、『宛がら雲梯も猶ほ攀つべからざる猛鷲の巢の如し』と評したが、實に見渡す限り、山と云ふ山、丘といふ丘、悉く砲臺ならざるは無く、堡壘ならざるは無く、旅順の一角は唯だ是れ鐵壁を以て、十重二十重に圍繞せられたる金城湯池である。而も之を守るは老将ドラゴミロフの訓練に成れる露國最強最銳の猛將勇卒であつた。予等は今日臆の間に已に、此の金城湯池を控へてゐたのである。而して八月十九日は即ち此の旅順の死命を制すべき總攻撃の第一日であつた。世界の戰史上に、最難最慘の戰闘として特記せらるべき旅順攻撃は、實に此日を以て其端を開いた。これよりして四ヶ月餘、我れ死守すれば、彼は死守し、我軍は多大の犠牲を償はし拂つて、旅順の山谷を焦土となし、彈丸の巢窟となして、遂に之を屠り、之を陥れ、環陸の列國をして、大和魂の發射せる肉彈の効力を驚愕せしむるに至つたのである。予等は大孤山麓に在りて、攻撃に關する凡ての準備を急いでゐた。殊に敵が副防禦中の

鐵條網破壊の積古

最有力量なるものとして頼んでゐた鐵條網——我軍が、かの樺杭と其の鐵線との爲に、幾多の生命を奪はれたる、其の鐵條網の研究に怠ら無かつた。見渡す限り一面の透進たる山陵は大小高低を問はず、遠く望めば點線の如くに、此等を取巻いてゐたは、即ち鐵條網であつた。

予等は之れを踏み之れを壊して進まねばならぬ。之れを破壊するのは工兵の本務なりとは云へ、其人員には限りがあつて、鐵條網には殆んど限りが無い。されば歩兵も亦た之れが破壊に努めなければならなかつた。それで我等は大孤河の河岸を利用し、鐵條網を假設して、工兵から其の破壊方法を教へられた。始めに先づ鐵條網が前進して直ちに鐵線を切る、續いて鋸の一隊が進んで杭を搦つて仆す、仆れなければ鋸で引き仆すといふ工合にして、此の網の一部を破つて突撃隊の進路を開くのであつた。

予等は鐵條網破壊が眼前に迫つた第一の仕事であつたから、一生懸命に其の下稽古をしてゐた。されど愈々實地に臨みしや、鐵條網破壊の爲に發進したる我歩工兵の決死隊は、恐るべき機關砲の銃前仕事をするのであつたから、いつも全滅して二名の生還者も無かつたのである。それに又た敵の鐵條網には電流が通じてゐる事が探知せられてゐた。併し

二百五

鐵條網の電流

敵の地雷

これには二説ありて、一つは強力なる電氣を通じて、觸るゝ者を殺傷するものなりと云ふ事、他は微弱なる電流によつて、我が決死隊が破壊の爲之に近づいた事が、直ちに首腦たる司令塔へ通報せらるゝのだと云ふのであつた。其の孰れにしても電流が通つてゐる以上は、従來の鐵線之れを切斷することは出来ぬので、假に竹を其柄に縛り付けて、電氣を手に導かぬやうにしてゐた。されど實際其の電流は頗る強烈なるものであつて、我兵は爲に電殺せられたり、又は手足を筈帯の如くに引裂かれて、所謂「電擊症」に罹つた。鐵條網の研究と共に、梯子を以て敵の塹壕を渡る方法も稽古してゐたが、實地に臨んでは、此の梯子も、深くして廣き塹壕に對して、殆ど何等の効力をも表はさ無かつた。地雷、之れは又た敵が一面に埋設してゐたので、之れを破壊するは工兵の力に依るものであつた。即ち其導火線を切斷するのであつた。双眼鏡で見ると、此の十九日まで、敵はまだ此處彼處に一團を成して、頻りに十字鐵などを使つてゐるのが見えだが、是れは即ち地雷を布設してゐたのであつて、我等は地圖と對照して、一々其個處に記號を付してゐた。鐵條網の杭は、各々十二遍づゝ槌で打込んでゐたとか、何處の谷には何個の地雷を埋めてゐたとか、斯の如き事までも、我等は洩れ無く記憶してゐた。又た偵察隊の探知した

地雷の布設法

所によれば、我歩兵の由つて肉薄し進むべき地際には、悉く地雷が埋めてある。而して其布設方法は中々に巧妙であつて、例ば地際之最も狭い處には踏落し地雷が埋めてあつて、突撃隊の先頭が之に引懸ると、其の爆聲猛煙に、後續者は自然地際の兩側へ身を避ける、すると忽ち其兩側の地雷が爆發する、それで突撃隊は残らず地際に埋没せらるゝと云ふ場合に仕掛けてあつたので、予等たるものは容易に前進する事は出来ぬのであつた。加ふるに各砲臺、各散兵濠の銃砲彈は、如何なる地際、如何なる岩陰をも射撃し得べく、三面挾撃の十字火を我に聚注して、一兵だも生きては還さじ、斃さては止まじとの設備は、殆ど非難の打處が無いほどに出来てゐたのである。

砲火開始

八月十九日の拂曉、我全砲兵は第一發の砲火を開き、攻撃目標たる東鷄冠山は素より、他の諸砲臺に向つて一連に砲撃を始めた。これを即ち我軍が總攻撃に轉ずるの端緒であつて、これより我が突撃各縱隊は、砲撃の援助に頼つて逐次躍進し、一步でも半歩でも成べく敵壘に近接し、砲火の効力の表はるゝを待つて、一氣呵成に突入するの計畫であつた。されば我砲兵は全力を傾注して、砲臺を破壊し、砲門を摧碎し、又た散兵濠に破牆口を開いて、我歩兵の大突撃の起るべき時機を作らんことに努めてゐた。

汽車彈

我より第一發の大蓋を切るや、敵の全砲臺も亦た直ちに一齊の火網を吐いて、我砲兵を撲滅し、我歩兵の前進を阻害せんと計つた。彼我の重砲が互に巨砲を交換せし、其凄じさよ！四斗樽大の地雷彈、又た榴彈は空氣に大振動を起し、其音、否、唸聲は雷霆の威を輕んじ、砲彈の火光は稻妻を散らし、爆煙は雲と蒸して一帶の戰場を蔽ひ、苟くも生ある者の此の間に呼吸する事を得べきかと疑はしめた。予等は敵の砲臺を「汽車彈」と唱へてゐた。恰も汽車が煤煙を吐いて、ステーションを出る時と同じやうな唸聲をしたからで、近く此唸聲が聞えると、間も無く大地は撼ぎ、凄じき響の内に、人も、馬も、岩も、砂も、皆粉々に碎かれて巻き揚げられる。乃ち此の汽車と衝突したものは、何一つ餘すところ無く潰し込まれるのであつた。而して其破片は一たび落ちて又た跳ね上がり、自由自在に駆け廻つてゐるものゝやうであつた。曾て何某小隊長は、彈片に首をカチリと切られて、僅かに皮一枚でブラ下つてゐた。又た或兵卒は之れが爲に、兩腕を根元からブッスリ切り取られたことがある。

敵の探照燈

此日は單だ砲撃を以て終るのみであつた。之れは最初からの計畫であつて、一二日の間は、砲戰を以て充分に敵を壓倒し、然る後に歩兵の突撃に移る手筈であつた。其夜、予は所用あつて師團司令部、即ち我が砲兵陣地の在る位置へ往つたが、折から暗夜の事であつて、彼我の砲火は、白き青き火道を作して空に閃き、これが地獄の街道筋の景色かと思はしめた。而して敵の探照燈は、鶏冠山、白銀山と目指す方より、綾十文字に我砲兵陣地を照し、グルリと廻しては、着々肉薄しつゝあつた我歩兵を照して、其行進を妨げんとしてゐた。我よりも亦た分捕の探照燈を糺かして、敵燈の光力を減殺せんとし、且つ敵砲を照らしてはゐるが、光力は遙かに彼に及ば無いのであつた。又た光砲即ちマグネシウムの花火は刻々に打揚げられ、兩國の花火よりも一入明るい光を放つて、恰かも空中に大アイクライト燈を吊り下げたやうで、一面を白晝の如くに輝らし、蟻の匍ふのも見えるくらゐで、それで我が突撃隊の運動を妨害するに、此上も無き威力を現はしてゐた。即ち光砲の照らす所、部隊の行動は手に取るが如くに見え透かされて、忽ち例のカタ／＼の機關砲が見舞つて来る。それ故、光輝がバツと空中で開くと、予等は「動くな／＼」と互に戒めるのであつた。

師團長以下幕僚は砲兵陣地に立つて、此の不夜城の光景を觀望してゐられた。探照燈がピカリと敵砲臺に見えて、我陣地を輝らすと、「あれを撃て、あれを撃て」と命令してゐ

光砲の効力

所用あつて師團司令部、即ち我が砲兵陣地の在る位置へ往つたが、折から暗夜の事であつて、彼我の砲火は、白き青き火道を作して空に閃き、これが地獄の街道筋の景色かと思はしめた。而して敵の探照燈は、鶏冠山、白銀山と目指す方より、綾十文字に我砲兵陣地を照し、グルリと廻しては、着々肉薄しつゝあつた我歩兵を照して、其行進を妨げんとしてゐた。我よりも亦た分捕の探照燈を糺かして、敵燈の光力を減殺せんとし、且つ敵砲を照らしてはゐるが、光力は遙かに彼に及ば無いのであつた。又た光砲即ちマグネシウムの花火は刻々に打揚げられ、兩國の花火よりも一入明るい光を放つて、恰かも空中に大アイクライト燈を吊り下げたやうで、一面を白晝の如くに輝らし、蟻の匍ふのも見えるくらゐで、それで我が突撃隊の運動を妨害するに、此上も無き威力を現はしてゐた。即ち光砲の照らす所、部隊の行動は手に取るが如くに見え透かされて、忽ち例のカタ／＼の機關砲が見舞つて来る。それ故、光輝がバツと空中で開くと、予等は「動くな／＼」と互に戒めるのであつた。

た參謀長は、悠然兩手を拱いて、

『花嫁さん見たやうだ。から目映しく輝らされちや、恥づかしくてならぬわい！』

此夜、予が中隊は揚家溝まで前進したが、着くや間もなく砲彈落下して、凄じさ響の内に、硝煙簇り起り、予が身邊にビシヤリと何か落ちて来た。

『誰がやられたのだらう？誰だ〜？』

煙の霽れた後には最早四五人の死骸が、恨めしさうに横たはつてゐた。其内の二人は、ツイ四五日前に到着したばかりの補充兵であつた。而かも其一人の死状は誠に殘酷の極であつた。腰から下の半身は、肉一片、骨一片も留めず、上體は眞黒に焦げて、眼球は飛び抜け、血は格別ソロ〜とは出ず、丸て魚を料理つた鹽梅で、目も宛てられぬ有様であつた。今一人の補充兵も足を碎かれて、血は噴水の如くに迸りし出てゐた。中隊長が彼の側に寄つて、

『大丈夫だ！シツカリせよ！』

と勵ますと、彼は中隊長を見て云ふやう、

『中隊長殿、まだ一度も戦しないで、やられたのは残念でなりません。早く快くなつて

無殘の死状

彈丸は魔物

來ますから、中隊長殿の中へ入れて下さい。』

『戦しないで、名譽の手負だ、早く快くなつて又た來い。』

彈丸の中らぬは、實に不可思議な定て、數度の劇戦に微傷さへ負はぬ者もあれば、それだとして彈丸が探して來るやうに、引つ付くものもあるし、漸く上陸したばかりで、まだ敵の顔も見ず、彈丸がドンナ味のものやら知りもせぬ内に、コロリと何が何やら分らずじまひに殺されるものもある。又た中りだすと、太白山の時の兵頭の如くに、一人で四十も五十も受けるものもある。是が俗に云ふ人の運不運に依るものか。十九日に師團司令部が大孤山の北斜面へ移轉した時、中央に師團長、兩側に參謀二名が立つて、敵方を觀望してゐると、忽ち砲彈が來て破裂したのに、師團長は微傷だに受けずして、兩參謀は無殘や即死を遂げた。殊に要塞戦であれば、前方にゐる者は無論命中の公算は多かつたが、後方にゐた者でも、彈丸を受けた事は野戦よりも甚だしいのであつた。まだ守備をしてゐた時の事であつたが、一日某兵卒が大便中に、流彈の貫通する所となつて即死したこともあつた。ナポレオンは『彈丸は汝を狙ひ、汝を追ふものではない。若し汝を追つて來るものとするれば、地下千丈の底へ避けても、矢張命中するぞ』と云つた。然り、彈丸は魔物であつ

兩參謀即死

那翁の金目

て、其命中如何は人力の能く左右する所に非らず、所謂天運である。曾てかう云ふ事があつた。太白山の戦後に、退却する敵の五六名が、駆歩もせず、大手を振つてノソリノソリと歩いてゐた。其所作が餘りに呑氣なので面憎く思はれたから、誰彼と無く能く狙を付け、平日練兵場で射撃する通りに、銃を据えて撃つたが、どうしても中らぬ。或將校は、おれが射止めてやると力んだが、とうとう中らず仕舞で、彼等は矢張りノソリノソリと歩いて、遂に姿を隠してしまつた。其後にも度々敵の中で、砲臺の上に立つて手巾を振廻したり、甚だしきは胸臆を越えて、我軍の方向へ尻を突き出して、大便をするやうな大膽不敵な奴もあつたので、小癩千萬、彼れ撃止めくれんすと、極めて精密なる射撃を加へても、更に手ごたへ無く、敵は悠々閑々と用便しすまして、濠内へ這入つてしまふやうなこともあつた。凡て数度の戰場を踏んだものは、次第に圖太くなつて来る。先にはヒューンと唸つて来る小銃弾にも、覺えず頭をチヨイと下げる。

横着者の中
らぬ

敵弾に敬禮

「誰か？ 敵の彈丸に敬禮するのは？」
と怒鳴る御當人も、同じくヒヨイと敬禮してゐるのであつた。これは敵弾が恐ろしいためばかりで無く、只だ一種の神經作用に基くものらしい。而して彈丸亂射の中になると、モ

ウ一々敬禮はしてゐず、一向に横着になる。銃砲弾の唸りも響きも、耳に馴れて何とも思は無くなる。ヒューンとかゴウとか耳に聞える時は、既に彈丸が通り過ぎた後の祭であるのを知ると、段々に度胸が据り、先に恭しく敬禮してゐた者も、今は胸臆の上に立つて、握飯を喰ふやうな呑氣沙汰をやり出す。而して彈丸は割合に斯る横着者を避けて通るものなのである。

第二十六 肉弾又肉弾

銃劍と喊聲

肉弾徒投

勇士の死屍は山上更に山を築き、戦士の碧血は凹處に川を流す。戰場は墳墓となり、山谷は焦土と化する。刻々針の進むと共に、幾多の生命は奪ひ去らる。若し夫れ攻むるに火器の精巧と彈藥の威力とを以て、能く敵の膽を挫ぎ、其隊伍を亂すを得んか、次いで確收すべき戦闘、即ち最終の勝利を博するに至るべき力は何ぞや。即ち銃劍と喊聲とである。銃劍の光は形、突貫の聲は心、此の心と此の形と相伴ひ活動して、敵を潰散せしむるものである。實にやスタンダートの一記者は『日本軍の喊聲は露兵の心臓を貫けり、其腸を裂れり』と云つた。さり乍ら此の劍尖の閃きと喊聲の響とが、那計り敵膽を寒からしめたにもせよ、予は彼時を追憶して泣かざるを得無し。予は咽ばざるを得無いたのである。嗚呼、第一回總攻撃の事たるや、彼の閃きは次第に消え、彼の響は次第に薄れたのである。幾許の鐵砲を抛ち、幾許の肉弾を費やしても、彼の堅牢無比と誇つた敵壘に對して効果を奏せざるに終つたのである。否、其後數回の大突撃も、肉弾又肉弾を投じて、勇士の血を涸

らし骨を碎きしに止まつたのである。されど此の多大の犠牲は畢竟徒事では無かつた。我々は素より幾許大の價を拂はんとも、一日も早く此の要塞を抜かざればあるべからざりしより、將軍は涙を潜めて犠牲を擲ち、部下は死を甘んじて、殊死決戦、奮つて肉弾となつて敵壘を撃つた。而して第一回總攻撃は事失敗に了つたと云はねばならぬが、これが爲に費やした肉弾は、先づ壘を破壊すべき第一次の有力なる楔子となつて、遂に陥落の期を呼び起したのである。

吉永大隊全滅

十九日以來、我砲兵は敵の諸砲臺、就中予等の目標としたる東鷄冠山に痛撃を與へたと見えたので、茲に二十一日の夜、吉永大隊は先づ突撃縱隊として前進することとなつた。そして第一に工兵の決死隊として、鐵條網を破壊せしむるに努めたが、幸にも此の危険なる作業に奏効して、少しく歩兵の進路を開いた。それで吉永隊長は令じて一砲をも放たしめず、一言をも發せしめず、闇に紛れて進み、黑影の一隊マツと許りに、敵壘前に立塞がつた。不意を喰つた敵兵は其儘退却し無ければならなくなつて、一齊に數十歩の後へ退いたが、乍ち後方で機關砲のけたまひの響かしたと共に、多數の増援隊が現はれ來り、一旦退却しかけた者を押し出して、ウラーの聲、暗黒の天地を蔽かして我に逆襲し來つた。

二百十六
吉永大隊は此處一步も退くなど號令しつゝ、此に大格闘が起つて、銃劍の火光は電光と散り亂れ、切りつ切られつ、互に此處を先途と戰つてゐたが、不運なり、胸臆に寄つて猛烈に指揮しつゝあつた吉永少佐（狂義）は、一發の敵弾に其の胸板を撃抜かれてバタリと斃れた。大久保大尉代つて指揮すれば、又た忽ち仆れ、代る人も代る人も皆仆れ、營に幹部のみか、部下も殆ど皆斃れて、而して来るべき善の後継隊は未だ來らず、敵の集中火は益す劇烈なり。由つて殘兵は鐵條網下の地隙に一先退いて、後継隊を待つてゐたが、遂に一兵の増援し来るものも無く、怨を呑み齒を嚙んで、哀れなる戰友の死屍を眼前に扣へたまゝ、翌二十二日の黄昏に及んだ。彼等は敵の直下僅かに十數尺の近きに在つて、實に十三時間、只だ銃を握りメめて、敵方を睨んでゐたのである。

二十二日の夜、更らに武富大隊は前夜の怨恨に報せんものと、一隊肅々、前夜押破つたる鐵條網を越して、猛然突撃に轉じたが、松岡大尉先づ傷つき、其の大腿は切取られて復た起つ能はず、三宅中尉（萬里白）は砲彈の爲に背部を掠められて、肺臓が飛び出した。慘は更に慘なるを加へ、烈は更に烈なるを増し、而して前夜の成功に誇れる敵は、我れ此處に立teri、汝を待つことと云ふはん許りの心増き振舞にて、探照燈はクルリ〜と

轉映して、我が突撃隊を照し、光弾は切り頭に白光を耀かせて、我れは見す〜敵の目標と露出する。「突き込め！突き込め！ウワァー！」と跳り込んだ時の柳川大尉（賢）の勇しかりし武者振かな。光弾の光に透かせば、半面は唐紅の血潮に染み、右手に軍刀を閃かせて、又たもや「突き込め！」と大音聲に叫んで進んだが、此大尉の壯烈なる聲は最早再び聞え無かつた。打ち込み打ち込む白刃は暗に閃いて、亂るゝ草の如くなりしが、それも次第に消え、先の喊聲はハタと止み、只だ敵兵のワ〜と罵る聲のみが、堡壘の間に聞えてゐた其の情なさ！敵は勝ち誇りて胸臆上に狂喜舞躍する。我れは悉く斃れて、唯だ山成す屍、川成す血、嗚呼何等の恨事ぞ！

先に重傷を負ひたる松岡大尉は、切斷せられたる大腿より、血は瀧の如くに迸しり出で、其内呼吸次第々々に細り、大尉も自から命の至れるを知つて、懐にせる機密地圖を裂き、鐵條網に罹つたまゝに、天晴とは云ひながら、無残なる最期を遂げた。而して大尉を收容せんとして、往きし者も往きし者も皆歸らず、共に大尉の傍に寄添ひて、永遠に眠つた。松岡大尉の壯烈なる最期は、其後、侍従武官を経て奏上せらるゝの光榮を荷つた。又た彼の柳川大尉は數ヶ所の手疵に屈せず、喊聲を放つて眞先驅に突入したが、今一步にて

敵壘に乗込まん其一刹那に、又たもや一彈を蒙つて起つこと能はず、遂に胸臆に倒れたが、後に至つて知りぬ。劍は折れ、力は盡きて、只た静かに永久の休みを求めんとした大尉は、無念や、豺狼に等しき敵人の刃に掛つて弄殺しにされたのである。

更に大突撃

旅團は愚か、よしや師團が全滅となつても、目ざす敵の致命點に一槍突き入れねばならぬので、數度の失敗に毫も怯まぬ我軍は、愈よ二十四日の朝まだ暗き午前三時と云ふに、更に一大突撃を行ふ事となつた。此迄予の中隊は揚家溝の地隙で、連日露營してゐたが、今夜二十三日愈よ此地を撤して、五家房なる集合地點へ轉進することになつた。それで中隊長は予等小隊長を集めて、

水盃を酌む

『訣別！此の二字の他に、君等に言ふべき言葉は無い。骸骨の棄場は、明朝の戰場と決めた。別れの水盃受けてくれ玉へ。』

中隊長川上大尉（喜八）から言はるゝまでも無く、予等たる者も素より、此處こそ命の盡くる時なれと、兼て覺悟したることなれば、互に水筒の水を酌み交して、

『今夜に限つて、水も甘露の味がする！』
中隊は静かに露營地を去つて、川端の黒き楊柳の蔭に整列した。嗚呼これを隊長部下相

負傷者の行列

見ゆるの最後だと思へば、予等は既に相互の爲に汗涙を浮べざるを得無かつた。やがて隊伍は徐々に行進を始めて、暗黒なる並木の下を通過してゐると、前日來收容せられた負傷者が、擔架に昇かれて後送せられつゝあるに邂逅つた。其列は實に長く連続して、何處が果であるか知れぬ程であつた。

『オイ、何處をやられたか？』
予は歩み乍らに問へば、一人は、

『脚が折れたのだ。』

『能くやつた！静かに行けよ。』

中隊は象の背のやうな山の後の河へ出たが、物の文目も分かぬ闇夜の事として、先が少しも知れぬ。地圖を手搜つて、五家房と覺しき方角へ行進してゐる中、目の前て何かガヤガヤ騒がしく人聲がするので、予は軀を屈めて、闇中を透して見ると、一帯の河原に長々と負傷者が列べてあつた。非常な數の負傷者かなと痛まじき心しつゝ、行進するに、暫くは彼等の數の限とならぬ。其の陰る聲、苦しうな息、早く手當は出來ないのか、此の露深き夜中に、何一つの被物も無しに曝して置かれるは、如何にも不愜やと、予等は一方ならず

河原一帯の負傷者

悲愁の感慨に打たれた。

大島將軍

兎角する中、予等の中隊は道を失つて、ドウしても五家房と覺しき地點へ達することが出来ぬ。而して遂に第九師團司令部に突き當つた。其時、大島將軍は夏乍ら、上下眞黒の軍服を着け、縮緬の兵見帯を引き結んで、大刀を横たへられてゐた。予は凜然たる將軍の威風を仰いで、古武士に逢ふの感を感じた。第九師團が盤龍山を占領する際に、將軍は陣頭に立つて、唯一人黒き目標を示しつゝ、全軍の志氣を鼓舞せられてゐたとの事である。初て予は參謀に途を尋ねて、中隊は其方向へ引返したが、どうしても志さず方へは出ぬ。又た聞けば右の方だと云ふし、右の方へ行けば元の道の方だと云ふし、遂に何方へ行けば宜いのやら、丸て途方に暮れてしまつた。集合時間は夜の一時と定められてゐる。然るに最早其の一時には數分を除すのみとなつた。若しも此數分間に、集合地へ着くことが出来ぬならば、何の面目があらうか？ 面目どころでは無さ。一兵でも多く参加せねばならぬ此處關ヶ原たる分目の戦争はどうなるか、中隊長は素より、予等も殆ど此際の處置に苦しんでゐたが、丁度其時に工兵隊の一兵卒に出逢つたので、五家房の方角を尋ねれば、彼は丁寧信切に、此の先で今工兵が對濠作業をしてゐる處を通つて行くなら、其處へ出られる

道を失ふ

死屍累々たり

中隊長の無念

だらうと教へてくれた。それで中隊は教はつた方角を指して行く中に、果して對濠があつた。之を傳つて稍や少時進み行くと、其切目があつた。それより先は少しの程は何一つ陰蔽の無き裸々たる畑の中であつたから、駆足で飛び出したが、ピカリと一閃、探照燈に照らされた。「伏せ！」と云ひさま、息を殺して其光の消えるのを待つてゐたが、更に消え無さ。其内、後の小隊との連絡が切れる。斯くする中、集合地點と豫想した場所へ来て見たが、我軍は一向に集合してゐるとも見えす。只だ眞黒な死骸がゴロ／＼轉がつて、彼處にも此處にも斃れてゐるのを見るばかりであつた。察するに我軍は既に攻撃の樞軸となるべき盤龍山東砲臺の下へ集合したのではあるまいか。手捜りに時計の針を透し見れば、一時は既に數分前に過ぎ去つてゐた。暗中に我本隊の所在を摸索したが、更に知れ無い。嗚呼、時は既に遅れたるか？ 中隊長の苦痛、予等の煩悶！ 嗚呼、時を失したる爲、此の大突撃に拱手傍觀の位置に立たなければなら無くなつたのか？ 中隊長は、『僕は腹を切つても申譯が立たぬ。』と嘆じたが、豈に獨り中隊長のみならんや。予等にして若し此夜本隊に合する事が出来無さならば、腹を切る位は容易い事、されど中隊の蒙るべき不名譽は、何の目か能く之を

本隊の所在
を知らず

雪くを得べしやー
連絡斥候、搜索斥候等、様々なる名の下に、各方面へ斥候を派遣したが、それも暗に鐵砲玉、何の咎も無ければ、何の報告も無し歸らぬ。さりとて最早一刻も躊躇すべき時で無かつたから、中隊は先づ盤龍山東舊砲臺に到つて最後の動作をなすの最良なるを思ひ、且つは本隊の戦鬪が始まらば、先づ彼の地點に在つて其動作に連繫すべしとの考案を以て、かの機關砲の折々カタ／＼と音するは確かに盤龍山ぞ、此の地隙は其山に通ずる道路ならんと、大方の目星を付けて、五家房から一條に通ずる土地の裂目を利用して前進することとなつた。

地隙の死屍

嗚呼此の地隙！僅かに幅二間足らずの一條の隘路、此處を昨は第九師團及び後備第七第八兩聯隊の苦戰奮闘したる所、其跡や何の状ぞ！擔架の一つも、藥籠の一つも運び來らるべき地位ならねば、死傷者累々として此地隙に堆積し、彼方にも傷に唸く者、此方にも擔架を呼ぶ者、唯だ靜かなるは已に絶命せる戦死者の骸なり。死屍地を塞めて予等の足を入るべき空隙無し。これを地獄の隧道！予等右に避くれば、傷つける同胞を踏み、左に地を求むれば、地には非ずして、闇中に色を辨識する能はざるカーキ色の戦友の屍なり。「死

死骸を踏んで前進

骸を踏むな！」と予は部下を戒めたが、予も亦た忽ち、氷臍になつて護謨の如き彈力ある我死者の胸許を踏み付けた。「赦せ！」之れを唯一つの念佛として行進したが、長き隘路に長く續ける死屍負傷者の事なれば、實際之れを踏み之れを越えずには、前進することが出来無かつたのである。

地隙將さに盡きんとし、今や一步にして鐵條網に近づかんとする位置にて、予等は一旦停止すると、忽ち左側面からカタ／＼と、闇中に火焰を吐いて見舞ひ來るは、敵の機關砲なり。又た忽ち轟く砲車の響、顧みれば我砲六門が此地隙を経て、盤龍山に押上がらんとて前進し來るのであつた。狹隘なる此の地隙には歩兵砲兵、入り交りて僅かに敵彈を防いでゐたのである。

煩悶又苦慮

既に此の山麓に達したが、我本隊らしきものは一兵だも認められ無い。予等の痛恨は那計なりしぞ！本隊は何處に在りや、攻撃は中止となりしか？など煩悶に苦慮を重ねた末、中隊長は再び元の五家房に引返して、後命を待つべしとの決心を起した。これを實に中隊長が苦心の末に出でたるもので、予等小隊長としては、銷然として其意に従はざるを得無かつた。又たもや地獄の隧道を後に引返すこととなつた。先に目を閉ぢて、「赦せ！」の

死屍砲車に
蹂躪せらる

本隊に合す

念佛を唱へつゝ、漸く踏み越えたりし我同胞の死屍は、再び予等の蹂躪する所となつた。予等は暗中に死屍負傷者を透し見れば、更に一層の慘憺たる有様となつてゐた。予等が先に通過した後で、我砲兵も亦た止むことを得ず、此の地隙を進んだ爲に、幾多の我同胞は無残や砲車の轍の下に押潰された。今が今まで猶ほ辛うじて虫の息であつた負傷者も、鐵の輪に命を絶たれ、今が今まで膨れ上つてゐた死骸は、轍の刃に寸断せられた。黒き腕、大なる脚、唇を噛みめたる白き齒、死して猶ほ眼せざる眼、半身の土中に埋もれたるもの、碎けたる骨、破れたる肉、流るゝ血、此等の折れたる劍、裂けたる銃と相混じて散亂せる其狀、これをしも酷烈酸鼻なりと云はずんば、果た何をか稱せん！

元の地點、即ち地隙の入口に歸つて待つこと稍や少時にして、暗中に黑影の隊伍がソロ／＼と進んで、百人二百人と次第に集まつて來たは、これを我本隊で、予等の喜びは極點に達した。聞けば絶えず探照燈又は敵彈に前進を妨止せられて、豫定の時間に集合するところが出來無かつたのであるとの事だ。何にせよ斯くて漸く本隊に合するところが出來たので、予等はホッと胸を撫て下した。共々に名譽ある第一回總攻撃の決死隊となるを得たるを喜んで、扱て此集合地點たるや、決して敵彈を遮蔽し得べく、且つは地區の廣い場所では無

將校集まる

最後の會合

いので、僅かに敵の瞰視を遮り得るだけの崖下であつた。

此時予等と共に集まつてゐた將校では、松村少佐は、曩に大孤山の戦闘に敵の逆襲に抗して、見ん事を撃退したる勇者であるが、當時右足を捻挫したれど、毎も負け嫌ひの少佐は、是しきの傷に大隊長たる重任を棄つることを諾せず、杖を突きながら、重大なる任務の爲に、身の不自由を耐へてゐたのであつて、此時も猶ほ未だ平癒せざる脚を、柳の枝に支へて先頭に歩み來り、予の側にドツカと腰を卸して、「愈々だね！...」

又た曩に大孤山に於て、令弟瀬川中尉と悲慘なる死別をなせし瀬川大尉も亦た來り、又た曾根少尉（嘉太郎）は藥盒を佩び銃を携へてゐた。餘りに異様の扮装だから、理由を問ふと、前夜の偵察に軍刀を暗中に失つた爲に、此武裝を擇んだとの事であつた。此の他數へ來れば夥多の將校、共に會して、互に成功を祈りつゝ、暫く談笑してゐたが、嗚呼、數時間の後、彼等は皆名譽の肉彈となつて盡き、唯だ僅かに生残りたるものは、松村少佐と予との二人のみとなつた。之を追憶すれば、逝ける勇士の面影や、當時の話振などが髣髴として、予は目のあたり彼等と接してゐるやうて、悲しくも亦た壯なる感覺に胸が一杯になるのである。

第二十七 必死隊

崖の下に、今や勢揃をなし終へて、予等は前進の命を待つてゐた。其時、人より人に傳はつて、一枚の紙片が予の許に達した。之げを開けて見ると、

臨終の傳言

『本田安吉は十九日に砲弾に撃たれたので、水を飲まざうとしたら、涙を流して、櫻井中尉殿へ宜しく云つてくれと、何遍も云うて死にました。』

高尾文吉

と認めてあつた。本田安吉とは、これより一年程前に、予の從卒を務めてゐた、忠實なる兵卒であつたのだ。彼が今生の別は臨んで、他事を云はず、唯だ薄恩の舊主たる予に對す暇乞の傳言を頼んだばかりであつたとは、予は何の辭を以て、能く彼に感謝することが出来やうか？予は今も猶ほ彼に最後の握手を與ふるの機會を得ざりしことを残念に思ひ、又た若しも彼に一言の別れを親しく告げ與ふることが出来たなら、彼も何程か喜んであらうにと思ひて、密に暗涙を潑へるのである。予は部下の小隊を手許に集めて、

部下に引導

『汝等と此に最後の別れをする。汝等は思ふ存分に奮闘してくれよ。此の戦は旅順が陥落するか否かの關ヶ原である。此の水は予が汝等に與ふる末期の水なりと思へ。』

死出の身仕度

と斯く云ひて、予は部下一二の生命を賭して辛うじて酌み得たる、貴き水筒の水を傾け、分隊長の水呑に分けて、水盃を取交した。やがて盤龍山の中腹まで前進すべしとの命令があつて、ソロ／＼と動き出したる予等は、既に引導を授けた部下を従へて、再び例の慘憺たる地隙を前進した。此の地隙を往來すること、之れにて三度、されど四度此の地點を返り來らうとは、衆皆素より期してをら無い。必ずや軍旗の翻翻たる陣頭に屍を晒して、天晴の功名せんずとは、乃ち各員の覺悟であつたのだ。愈よ前進となつた時には、成可く輕装をなし、重燒麵包の如きも二三日の命を支持し得るだけに止めて、餘は後に殘して置くこととした。予の身仕度は先づ斯うであつた。腰には國旗をブラ下げ、首には手拭を巻き、且つ足袋裸足で、恰も夏祭の踊子といふ風采であつた。携帶品としては軍刀と水筒と三枚の麵包とで、これが死出の花舞臺に現はるべき扮装であつたのだ。

想へば今も肌を粟を生ずる此の地隙！予等は累々たる死屍を踏み越え、越え、拔足差足、鼻口を蔽うて前進したが、戰友を脚下に陥み蹂る事の如何に心辛かりし！一人の

負傷者を慰む

負傷者が片隅に小さくなつて唸いてゐたから、予は彼に傷所を尋ねた。すると脚部の骨折で、既に三日の間、一粒の食一滴の水も口にすることが出来ず、それに擔架は來ぬので、戰團以來今迄此處に只だ斯うしてゐる許りで、死を待つて居るのだと云つた。予は彼を慰めて、之れを食つて待つてゐよ、今にも衛生隊が前進して來るからとて、彼の三枚の麵包を與へたれば、彼は手を合して予を仰ぎつゝ、涙ながらに、予の姓名を聞かしてくれと頼んだ。此の慘狀に予も一方ならず悲みを催して、唯だ『健康でゐよ』と云ひ残して、更に前進して、いよいよ盤龍山の鐵條網にかゝつた。

盤龍山苦戰の跡

此砲臺は既に第九師團及び後備第七第八の兩聯隊が、血を濺ぎ肉を破つて占領し得たる所で、之れぞ我突擊縱隊が據つて以て、東鷄冠山北砲臺並に望臺に向つて大攻撃を實施すべき重要な地點であつた。されば之を占領する迄に、大島將軍麾下の兵見が活躍奮闘、幾許の艱苦を具にしたことか。乃ち彼の地隙の慘狀は以て之を想見せしむるに足るものであり、又た鐵條網の破目を駆け走つた時にも、予の目には暗さ中にも、幾多の歩兵工兵が、或は鐵條に纏はれ、或は棒杭を抱へたまゝ、或は鐵鉞を握つたまゝで、折り重なつて斃れてゐるのが見えた。

軍旗を仰ぐ

予等が盤龍山の中腹に集合した時に、予は嘗て奉じたりし軍旗が、將基倒のやうに重なり重なつて集つてゐる予等の頭上に、黒く淡く翻へつてゐるのを見たので、予は過ぎし日を想ひ起して、一方ならぬ感慨に胸を躍らせた。予は軍旗の樹てる處まで匍ひ上ると、巖に大孤山の麓にて、盡さぬ名残の内に別れを告げたる聯隊長に確と出逢つた。

『聯隊長殿、櫻井中尉です！』

青木大佐は予を見て、懐かしき思ひを浮べられたるものゝ如くに、

成功を祈るぞ

『櫻井か？ 成功を祈るぞ！』

成功せよとの聯隊長が最後の訓示、我たる者、なにか成功せずして已むべきぞ！ 骨は碎け、肉は破るとも、なにか成功せずして止むべきものぞ！

吉田中尉に會す

時に山嶺の方より聲して、予を呼ぶ者があつた。それで予は聯隊長の身邊を解して登り行けば、同國の友なる吉田中尉（盛三郎）が、猶りククネンと坐つてゐるのであつた。中尉が第九師團に屬して、旅順方面の戰團に従事してゐることは聞いてゐたが、ツイど廻り合はなかつたのに、圖らざりき、今や、予等が將に強襲を行はんとした場合に至つて、此處で彼と邂逅せんとは。中尉は、

『櫻井君、酷いね！ 昨今の戦闘は……』

予は吉田中尉の此處に在るを訝かりしものから、

『君は獨り、此處で何をしてゐるのだ？』

『マア此の死骸を見てやつてくれ……』

予は予の身邊に黒く集合せるものは、悉く我聯隊の生兵なりと許り思つてゐたに、何ぞ知らん、此のカーキ色の密集せる兵士は、實に中尉の部下にして、而かも悉く死傷せる健兒ならんとは。嗚呼何等の慘ぞ！ 其死骸は二重三重と重なり、四重五重と積み、或者は手を敵の砲臺に掛けて斃れ、或者は既に乗越えて、敵の砲架を握れるまゝに死したるあり、而して苦しさ岬壁の深き地の底より起るが如くに聞ゆるは、疊み重なつた下に在る負傷者が發したのである。勇壯なる此突撃縱隊が、味方の死屍を乗り越え踏み越え、近く敵壘に肉薄して、魚鱗掛りに突き入ると、忽ち敵の巧妙なる機關砲の運用で、攻め寄る者毎に一々撃殺された爲、死屍は數層の傾を打つて、敵壘直下に斯くは悲惨なる状況を現出したのである。戰友の討死に憤激して、イザ用ひ戦せんと馳せ行く者も、馳せ行く者も皆又斃れて、兵見悉く敵陣の犠牲となりしは、豈に無残ならずや！ 而して吉田中尉は死せる部

死屍は四重
五重

下をも棄て去り難く、死骸番となつて獨り此に残れる、其胸中の情や如何なりしぞ？ 中尉は其後十月二十七日未明に、二龍山に於て壯烈なる戦死を遂げたが、此時の對面は實に予との生別又死別であつた。

集合 悉く終るや、聯隊長はやをら立つて、

『我等が報國の事、實に此の一戦に在り。旅順の死命を制するも亦た此の一夜に在り。我が精銳なる突撃隊は、乃ち決死隊に非らずして必死隊なりと覺悟せよ。汝等が戦闘の壯烈なるは、父たる予の最も感喜に堪へざる所なり。汝等努めよ！』

との訓示を授けた。然り我等は故國を去つて、前進の第一歩を運びし時、既に生還を期せず。戦に臨む者は素より死を決す。然るに今回の事、死を決するは未だし、必ずや死せずんばあらず。我等は實に必死隊であつた。必死隊の名稱は予等に一層の奮勵を與へ、又た副官が讀み上げたる、陸軍大臣よりの『成功を祈る』との電文は、予等をして意氣更に軒昂たるものあらしめた。

必死隊と覺悟せよ

必ずや死せん

予は今より總攻撃の壯状と又た其慘況とを語らん。さりとて僅かに一小隊長として、當時九て夢中で戦闘した予は、只だ暗中に物を探るが如くて、微かに記憶に存してゐるだけの

事を繰述するの外、仔細に戦況を語ることは出来ぬ。而して此の物語が、予の自慢話か、手柄話の如くに聞ゆるかならんとも、寸功だに無き予は、安んぞ自から誇り自から高うするの勇氣を有すべきや。唯だ讀む人に與ふるに、旅順の總攻撃は斯くも慘烈なりしものかとの感想を以てせば、予が事は足れるものである。

必分隊の兵見は静かに立てり。悠然死地に踏み行けり。而して累々たる死屍を分けて、此の盤龍山を越えた。五名又六名宛、逐次に跳り越えて木柵ある斜面に取り付いた。予は聯隊長に、

『それでは参ります。』

と別を告げて立ち上る途端に、グサと死骸の頭を踏み付けた。扱ても我等の目指す處は、北砲臺であつた。而して又た望臺であつた。

先づ敵の第一散兵隊に於て、爆薬戦が開かれた。我兵の擲げ込む爆薬は見事爆發して、散兵隊は乍ち火事場の如く、板が飛ぶ、土囊が吹き出す、頭が飛ぶ、足が振切れる。火焰は黒烟と共に煽り上つて、赤き火光は予等の顔を輝らして物凄く、戦線は一時に騒がしくなつた。斯くする内、敵は叶はじと思ひけん、此地點を棄て、何處へか逃げ去つた。ヨ

シ！進めや！進め！進むは此時ぞ！敵に追尾して進めや！一氣に乗り取れやと、予等は勝ち誇つて勇み進んだ。中隊長長川上大尉は軍刀を翳して、『前へ！』中隊長と並んでゐた予は、『櫻井小隊、前へ！』

予は斯く叫びつゝ、進路を見届けんが爲に、中隊長の左側を駆抜けて、壘道を進んだ。前に立塞がつた黒き大の物は何ぞ？北砲臺下の堡壘であつた。後を顧みれば一兵だに従ひ來らず。しまつた！連絡を切つたかと、予は煩悶して左方に身を避けつゝ、我が第十二中隊を呼べば、

『櫻井中尉殿……』

と答へて速りに呼ぶものがあつた。聲を頼りに歸り來れば、伊東曹長（勝馬）が、聲を揚げて泣いてゐた。

『何で泣くか？どうしたのか？』

曹長は涙をハラ／＼と流しながら、予の腕を確と抱へて、

『櫻井中尉殿、あなたは今大事の軀です……』

『泣く事は無し。どうしたと云ふのか？』

彼は予に耳語して、

『中隊長殿が戦死しました。』

中隊長戦死

予も亦た之を聞いて泣いた。中隊長が「前へ」の號令は、只の今の事ならずや、予が中隊長を離れたも亦た只の今ならずや。然るに大尉は既に亡き數に入つた。一瞬にして恩愛深き川上大尉と予とは幽明を隔て、夢か現かと疑へば、伊東曹長の指示する所、中隊長の遺骸は、僅かに二三間を離れた壘道の中に斃れてゐた。予は走り寄りて大尉を抱き起し、

『中隊長殿……』

予は最早何とも言葉が出無かつた。されど斯くてあるべきにあらねば、予は中隊長の持てる機密地圖を取りて、猛然として奮起し、十二中隊は是より予が指揮するぞと叫んだ。而して中隊長の死骸は負傷者の中にて之れを收容して下れと命じた。一人の傷兵が中隊長を昇さ上げんとすると、又たもや急所を撃たれて、隊長に寄つて死んだ。代る者も、代る兵も皆傷つき斃れた。

中隊長の死

予は二宮少尉（駒太郎）を呼んで、小隊は悉く纏まりあるやと尋ねたれば、然りと答へた。予は又た伊東曹長に連絡を絶つ勿れと命じ、而して予は散兵線の中央に在ることを

示した。されど暗夜の事として、如何なる地形なるか、孰れの方面より進むべきか、更に辨別が出来ず。暗き空にヌツと響きたるは望臺と北砲臺となり。天嶮は前に横はり、而して身は釜中に在るに等し。かくても猶ほ一隊は袖を連ねて前進せんとす。

『第十二中隊、前へ！』

予は歩を右方に取つて進んだ。丸て夢中、實に當時の情況は殆ど何事をも明かに記憶せずと云ふの外は無し。

『連絡を切るな！』

これを予が此時に叫んでゐた唯一の號令であつたのだ。暫くにして手足と頼みたる伊東曹長の聲も聞えずなつた。暗に閃く劍尖も次第に薄らぎ、黒山を築きつゝ進んだ部下も、今は餘す所數人となつた。忽ちにして予は棍棒もて毆られたやうで、ドタリと四這に倒れた。予も遂に傷ついた。予は右手を撃られたのである。此時、盛に打揚げられてゐた敵の火箭の光に、累々たる部下の死骸を見ながら、予は傷ついたる右手を差上げた。見れば腕關節より碎けて、ブラリと垂れ下り、血は止め度無く迷しり出た。予は兼て縋帶包を解いて携へてゐたから、直ちに三角巾を巻きつけ、手巾にて包み、敵壘に樹てんものと誓ひし日

右手を碎か

の丸の旗もて頸に吊した。

見上ぐれば望臺は谷一つを隔たる彼方に、空を摩して峙てり。水を衝まんと欲して腰を
扱れば、水筒は已に無く、吊車のみが足に纏つた。生兵の聲は次第に静まり行き、之に反
して憎き敵の光輝の光と、機關砲の凄じき響とは、愈よ烈しくなつた。予は静かに兩脚を
撫て、未だ其の傷つかざるを知りたるより、再び起ちて軍刀の鞘を打ち棄て、白刃を左
手に杖突いて、夢中に此山を下り、圍壁を飛び起して、望臺に攀ち登つた。

望臺に上る

長大なる重砲はスツと前に響えた。而して今や部下畢竟幾人がある？黒く群がれるもの
は皆死屍なり。生あるものは來り従へと呼ばはれども、答ふる者としては幾許ぞ？恐らく他
隊も等しく損害を蒙りたるならんと思ふと、予は實に心細くなつた。最早續き來らん援兵
も無し。一人の國旗を持ちたる兵卒を堡壘上に登らせて、之を樹てしめんとしたが、乍ち
聲も立てずに斃れた。

逆襲！

俄然此の世の聲とも思ふべからざる、凄じき叫聲が四面から起つた。

『逆襲！』

黒き木柵の如き敵の一隊が、堡壘上に現はるゝと見ゆるや否や、忽ち予等を取圍んで賊

一大混戦

聲を揚げた。地利の悪しき悲しさには、之に敵する由も無く、寡兵の悔しさには、之れに
刃向ふ力無し。予等は峻坂を跳ね返された。顧みれば敵は歩み乍らに射撃してゐた。而し
て予等は先の圍壁に達するや振り返つて敵に面した。乃ち茲に修羅道の一大混戦が演じ出
された。劍尖入り亂れて戦つた。敵は機關砲を引き出して、縦横無盡に撃ち放し、敵も味
方も諸倒れとなつた。併じ予は其場の現状を委しく語るとが出来ぬ。何となれば予は夢中
であつたのである。唯だ予は軍刀を無暗に振り廻してゐた。又た手應へもあつた。白刃と
白刃との亂れ打、彈丸の雨霰、此處も彼處も無二無三死者狂ひの突撃奮戦、遂には喊聲も
立た無くなつた。忽ち予の軍刀は一響きして折れた。左手は貫かれた。倒れて復た起ち上
らん隙も無く、一彈來つて右脚を摧いた。踏みしめて起ち上がらんとしたれば、物の崩る
るが如くに、力なくバタリと轉倒した。一兵卒あり、予を見て、

左手貫かれ
右脚砕く

『櫻井中尉殿、一所に死にませう……』

予は彼を左腕に抱いた、無念！無念の切齒をなしつゝ、此の接戦を打守つた。心は狂へ
ど、身は又た起つこと能はざるものであつた。

第二十八 死中再生

小野健助

八月二十四日の朝は白々と明け放れた。戰場は彼我の死傷者を以て埋められてゐた。予は抱ける兵士を顧みれば、彼こそ曾て予の教育したりし小野健助なる一等卒であつた。彼は右眼を失ひ、横腹をも刺られたから、最早是迄とや思ひけん、予を見て共々に死せんと叫びしことの健氣さや。彼を抱ける予の左手は、赤黒き血の塊を噴き出して、小野の頸元に流れ込んだ。小野は静かに手を動かして、綱帯を取り出し、予の左手を包みくれた。予は斯く敵圍に陥りたるが上、この重傷を蒙りたることなれば、所詮此場を立退かんことは思ひも寄らず。今にして命脈が絶え無ければ、あめく敵手に陥つて、死に勝る辱を受くるは知れた事、されば今は直ちに潔く腹掻き切つてと、心は急れども身には寸鐵をも帯びず、四肢も亦た用を辨せざるを奈何にかせん。只だ無念の涙に悶え苦しむを遺憾千萬！

『小野、おれを殺して歸れ！この有様を報告せよ。』

と予は彼を促がして殺せよと頼んだが、彼は諾はず、血は兩眼を盲しながらも、固く銃を握つて、

『抵抗します。』

抵抗します

小野を返したし

予は小野を諭すに、敵は逆襲に轉じて、予等は其包圍に陥り、而かも昨夜來、非常な深入をしてゐるから、此儘にてあらんには、唯だ敵の捕虜となるばかりだ。さうならばドウするか、おれは手足が立たぬのだから早く殺して、汝は遁れ歸るが、慈悲だぞと云へど、小野は既に正氣で無く、唯だ『抵抗します。』とのみ云ひつゞけてゐた。予は最早成すべきやうなし、此上は天命に任かせて、息の盡くるを待つの外無しと思つたが、ても何にかして小野を助け返して、現下の戦況を報告さすべき爲の手段に苦しんでゐて、遂に、『擔架を持つて來い、歸るから。』と促し立てた。先の地隙へすら、愛の化身たる擔架の運び來られぬものを、今、此敵圍中に何とて之を持ち來ることが出来やうか。予はそれを承知してゐた。されど若し彼にして幸に生あつて本隊に歸ることを得ば、予の戰死——實に數時間の後に予は息絶えた——を傳へ得べしと信じて、かくは彼に命じたのである。素より夢中の小野は、斯くと聞くや乍ら『待つてゐて下さい』と云ひなり、圍壁を跳り越して其姿を失つた。彼れ果して首

尾能く敵陣を脱して遁れ歸りしか？後日、予は彼と病院に於て再會して、互の奇遇に愕くのみであつた。

後務を盡し
たり

予は幾多の死せる部下(?)に取巻かれて、孤り横たはり、此時は予が生命を天地の間に受けたる以來の、最も神聖なる、最も悲痛なる、而して又た最も無念なる時であつた。予はネルソンの語の『天に謝す、予は予の義務を盡したり』を幾度も繰返して、事假令成らざりしも、予は茲に一代の務を終へたるを喜んだ。他には何事をも考へず、唯だ止め度無く進しり出づる血潮が刻々に、享年二十五歳の生命を奪ひ去りつゝあるを自覺してゐて、而して自傷の痛苦は毫も之れを感じ無かつた。敵の若干は予の前方二三間の濠内を右往左往に馳せ、一人て五六挺つゞもの銃を引受けて、我が殘兵に向つて射撃しつゝあつた。予は目を見開いて彼等の動作を打成つてゐた時、後を振り向いた一人の敵兵は、予の猶ほ生きているのを見て、他兵に目配せし、乍ら三四發ドン／＼と撃ちかけた。而して劍を揮ひ跳り上つて進み寄つた。予は目を閉ぢた、予は將に突き殺されんとしたのだ！嗚呼此身は鐵石に非らず、而かも四肢摧けて戦ふべき力も盡きたる予は、何とて之れを禦ぎ、之を追ふことを得んや。予は正に豺狼の毒牙に劈かれんとしたるなり！然るに天は猶ほ予を棄てざ

將に慘殺せ
られんとす

猛卒の奮入

りしかり、嗚呼此刹那、嗚呼此瞬間、予は遂に近く接戦の聲を聞くのみにして、名も無き蠻奴の劍尖より免れたり。敵兵の予を目掛けて跳り上つた咄嗟に、我が殘兵の五六が飛び掛つて、即ち白刃亂れ合ひ、而して共々に斃れた。斯くして只だ死を待つばかりなりし予の息の根は、可憐なる戰友の生命を以て購はれて、辛うじて繼ぎ止められた。

折しもあれ、阿修羅王の勢にて、ドッカと圍壁に立ち上がり、銃劍高く差上げ、喊聲を放ちつゝ、敢然として跳り込んだ一兵卒がある。予は彼れの猛勇と剛膽とに喫驚した。嗚呼、されど彼は何處よりか飛び來りし敵陣に、忽ち撃止められて崩るゝが如くに、予の右側に僵れかゝつた。死を賭ること歸するが如しとかや、彼は寧ろ死を求めんが爲に、最後の喊聲を張り揚げ、健氣にも唯一人敵中に躍り込んだのである。

我軍の砲彈

稍あつて、我軍よりする砲彈は、盛んに予等の頭上に破裂し始めた。着發彈は予等の身邊に落下して血煙を揚げた。或は足、或は手、或は首が、眞黒に寸断せられて飛散つた。予は觀念の眼を閉ぢて、我砲彈に一思に粉碎せらるゝことなら、これこそ遺憾無き介錯なれと念じてゐたが、予が肉、予が骨は猶ほ其碎破するところとなるを得ずして、小破片のみが予の手足を傷つけた。予が左足の邊にゐた一負傷兵は、此の砲彈の破片で、顔の眞向

「日本萬歳」
 な叫ぶ
 ら幹竹割に劈かれて、足搔き藻掻き、虚空を攫んで苦しんでゐたが、頓て俯伏になつて息は絶えた。予も亦た彼の如くに早晩絶命して、陣頭の犬の腹を肥やす者なりとは知つてゐたが、半死半生で一氣に死にもせず、さりとて再び戦ふことも出来ず、只だ一分刻みに猛鷲の爪に引裂かれるとは何たる因果ぞ！予は又た頭上にて、「日本萬歳」と叫ぶものゝあるを聞いた。目を開いて微かに一瞥すれば、嗚呼彼も亦た傷つける狂者であつた。神魂既に喪失して、猶ほ口には萬歳を唱へて狂することの何ぞ悲壯なる！彼は頻りに萬歳を唱へ、又た「日本兵、来い〜」と絶叫した。攻むるに殘卒無く、援くるに生兵無き今頃の慘戦は、彼も亦た其悲しみを共にせしか。彼は叫び狂ひ、狂ひ疲れて、果は唇を結んで色を失つた。予は目を閉ぢて、汝安かれと念じた。

日章旗下の
 二兵

數個所の傷口より流れ出づる予の血潮は、殆ど全身を朱に染め成した。細帯を巻き付けたは唯だ兩手ばかり、他は其儘に打棄て、あつたのだ。予は目を閉ぢては靜かに思ひ、目を開いてはギョ〜と見廻した。予は左方を顧みたるに、翻翻たる日章旗の下に斃死せる二人の我兵あるを見た。思ふに此地點は此勇敢なる二兵によりて占領せられたる後、一の中立地帯となり、我兵到らば敵の砲火に碎かるべく、敵兵現はるれば我砲陣の斃す所となつたのである。嗚呼、此の二兵見、彼等は占領の功を遂げたるを喜んで、笑つて眠るものに非らずや。蓋し是れ一掃好箇の活ける詩では無いか？嗚呼、何等の詩人ぞ、之れを歌つて、此の二勇士を弔はんとするものぞ！

敵の暴虐

此の戦場の詩景を認めて微笑を催したる間も無く、予は生來最も無念に堪へざる一事に出逢つた。嗚呼文明の人よ、仁義の士よ、冀はくは之を記せ！予は曩に負傷の柳川大尉を虐殺したる蠻野の露人の悪逆を怨んだが、今は又た目撃の間に於て、彼れが殘忍を横暴にするを實見したのである。予は一人の傷つける敵將校が、連りに手招きして、己れの脚を指しつゝあるを見た。其時、これも亦た傷を蒙れる我看護手一名が這ひ上つて來た。敵將校は彼れに向つて、脚を細帯せんことを求むるが如くに手真似した。乃ち看護手は彼れに近づき、我傷より流るゝ血潮を拭ひも敢ず、腰なる藁より細帯を取り出だして、敵の脚に巻きつけた。彼れ看護手は能く仁俠博愛の道を守つて、敵とは云へ、傷つける者に何の恨も無し、之れも等しく國事に勞した勇士だと思つたから、甲斐々々しく、其の傷つき惱める脚を細帯し與へたのである。其仁や實に芳しく、其義や實に慕ふべく、如何に殘忍齷齪なる敵とても、此の仁義の看護に涙を以て感謝せねばならぬのである。然るに彼れ敵將校は、

敵に細帯す

二百四十三

此恩人に酬ゆるに何を以てせしか？握手か、感涙か？否々決して然らず、咄、彼れ暴戻なる將校は、此の仁侠の看護手に報ずるに、拳銃の一彈を以てしたのである！文明の人よ記せ！仁義の士よ忘るゝ勿れ！看護手が綑帯を巻き終ると共に、敵將校は乍ら腰なる拳銃を抜いて、一撃以て恩人の生命を奪ひ去つたのである！此状を目撃したる予が悲憤の念は那計なりしぞ？

恩人を殺す

悲憤禁せず、怨恨制し難き予は只だ目を閉ぢて切齒したばかり、既にして息苦しくなつた。絶命の機も最早遠からじと覺つた。時に予の胸倉を掴んで引き上げたものがある。須臾にして又た放つた。予は微かに目を開き見れば、二三の露兵が坂を登り行いてゐた。嗚呼、予は既に捕虜たるの耻辱を受けんとしたのである！予を掴み又た予を棄てたる此の一刹那、これぞ生死のけぢめ、榮辱の境なりしぞ！敵は一旦手を掴み上げたも、既に死せりと信じて打棄てたるならん。さもありぬべし、予の全身は悉く朱に染み居たれば。時に何者か一人、予の左側に「ヨコ」と走り寄つて、無言の儘に仆れ掛つた。死せしかと思へば、さにはあらず、死者の眞似せるなり。稍やあつて彼は予に耳語して、「歸りませう、私が助けまします。」

既に捕虜たりんとす

私が助けま

予は絶えぐに苦しき呼吸の中に、彼を見れば、ツイを見知らぬ一兵卒なり、其頭には綑帯を施してゐた。予は彼の慈言に答ふるに、予は今の場合、逆も生還することを得ず、願はくは予を殺して歸れと頼んだれば、彼も生命を全うして連れ還ることは覺束無いが、死敵だけでも取つて歸る、敵中に棄て置くことは出来ぬと云ひなり、予の左手を握つて其肩にかけた。其途端、先の程より予の右側に仆れて唸り居たりし彼の勇卒は、苦しさ息の中に、涙聲にて、

末期の水を

「中尉殿、末期の水を飲まして……」

予が胸は張り裂けんばかりになつて、強ひて再びドツカと彼と共に仆れた。彼は予の部下なりしならん、予を呼んで末期の水を求めたとは、如何にも不惑では無いか。予は部下を棄て、獨り歸る心になら無かつた。

「もしまへ、水を持たぬか？」

予は手を背負つた兵の左側にあるに尋ねたれば、彼は己れの水筒を取り出して、やをら予の胸を越して、隔終の兵の口に注いだ。すると彼は摧けたる手と手とを合して、微かに「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と唱へて、やがて靜かに息を引取つた。

圍壁を越ゆ

予は幾多の傷つき且つ斃れたる戦友や部下を棄て、還るに忍び無かつた。されど彼の兵は又も予の左手を握つて擔ぎ上げ、一息に走つて圍壁を飛び越すや、共にバタリと倒れた。而して手早く落ちたる外套を拾つて、予に打かけると、又た無言で予の右に伏した。かくて予は見知らぬ一兵に救はれて塹壕を出たが、其時圍壁の直角に脚が觸れて、始めて劇烈なる苦痛を感じた。彼は暫くして又た予に密語した。

『彈丸が今大分來ますから、少し待つておまじやう。』

彼は己れの銃剣を拂ひて、手拭にて予の折れたる右脚に副へて縛り付けた。其時予は喉渴きて水を欲すること一方ならざりしより、彼兵は其水筒を傾け盡して予に與へたが『澤山飲んではいけぬ』と云ひ、又た『少し辛抱して下さい』と屢ば慰めた。又た予の傍には幾多の戦友が噓き苦しんでゐたので、彼は信切にも、落ちたる水筒を拾つて、彼等の口に注ぎ與へた。彼は敵に見咎められじとや、死せる真似して、予を蔽ひながら靜かに伏してゐた。予は未だ此義侠なる兵卒の名を知らざりしより、

『さうへは何と云ふか？』

彼は微かなれども、力を籠めた聲で、

少し辛抱して下さい

近藤竹三郎

『近藤竹三郎と云ひます。』

『何處の聯隊か？』

『高知聯隊です。』
『さうへは何と云ふか？』

何の宿縁ぞ

予は實に部下にもあらず、同聯隊の兵にもあらず、未だ嘗て一瞥だにせしこと無き、他聯隊の勇士の救ふ所となつたのである。彼と予と、予と彼とは、如何なる宿縁の糸にて結ばれたるものなるかを知らず。されど知りぬ、我が軍隊に於ける上下の關係の親密なる事は、此の近藤の如き、士卒の龜鑑、勇士の美談として千古に傳へらるべき人を産んだ所以である。嗚呼此人今や既に亡し、哀い哉！予は救ひ出だされてより數時間の後、人事不省に陥つて、而して再び蘇生したりし時、先づ予の念頭に浮んだものは、即ち近藤竹三郎てふ慕はしき名であつた。

飽まで救はんとす

竹三郎、彼は先づ予を望臺の敵陣中より救ひ出だしたるも、我軍の在るべき地點へ到らぬには、前途猶ほ遠く、剩さへ白晝敵前に機關砲火を肩して歸らなければならぬのであつた。此の場合、彼は自からも負傷せる事として、到底生命の覺束無き予を打棄て、早く安全の地に遁るゝの方法を求めれば良きに、彼は『私が助けます』と誓つた一言を飽くま

でも守り、千難を排し、萬苦に耐へ、而も慧敏なる巧智を廻ぐらして、如何やうになりともして、素より何の恩義の係ること無き予を救ひ出さんとしたのである。彼は身を以て予を蔽ひつゝありしこと少時にして、

『今又た彈丸が澤山來だしました。けれど夜になつたら、敵が突殺しに來ますから、今から行きます。死んだものと思つてゐて下さい。』

彼は予を外套に包みて、而して近傍に在りたる一傷兵を手招いた。傷兵は匍匐して來りて、予を見るや、

『櫻井中尉殿では無いですか？』

彼の誰なりしかを覺えず、されど予の名を知りしからは、彼こそ同聯隊の兵なりしならめ。彼は予に『ひどくやられましたなア』と云ひ、又た竹三郎と何事か密語いた。予はこれより此二人に昇がれて、今は懐かしき戰友の無残の墳墓となりし望臺を後にした。獨り還るは残れる死者負傷者には濟まぬことだと思ひつゝ、運び往かれた。二人は五歩にして伏し、十歩にして仆れ、其都度死人の真似をなして、首尾能く敵の目を欺さつゝ、予を昇ぎ往いた。而して予は未だ傷の痛みを覺えざりしも、摧けたる骨の相磨する心地して、

ひどくやられましたナ

敵の目を欺

人事不省

得も云はれぬ不快の感をなしてゐた。鐵條網も越えた、胸膈も去つた。而して遂に燒くが如き日光直射の眞晝中に、鷄冠山下と覺しき、鐵條網の少し下の地際まで運ばれた。

此處に横へられし事少時にして、予は遂に氣が遠くなつて、眠るが如くに次第に何事も知らぬやうになつた。予は出血の夥だしかりしが爲に、遂に人事を辨へざるに至つたのである。此時に於て予は既に戦死者の數に算へられ、郷里に在りては、我師村井氏の如きは此報を聞いて、曾て予の先生に贈りたりける端書を佛壇に供へて、香花を手向け與へられたることである。

予は一旦絶息して數時間を此地隙に過したりしなり。然るに地獄の門は猶ほ予を拒みて入れざりしか、予は再び息を吹き返したり。其時グワツタンと重砲彈が遠からぬ處にて破裂して、石と砂とを飛散せしめ、予も其砂時雨を浴びた。

この響きにて我魂は再び此土に呼び還されたるものと覺えた。心再び我に返るや、俄かに傷の痛みの劇しきを覺え出した。試みに比較的健全なりし左足を動かしたるに、毫も動かず、血は流れて凝つてゐた。而して又た此時、予が顔の上に國旗もて日蔽を作つて、猶ほ未だ予の側を去らずして打守りたる、彼の近藤竹三郎のあるを見た。予は爲に涙を

近藤猶在リ

流して、其忠實なるに感謝した。

彼は手を纏へる外套に棒杭を縛り付けて、折柄集り來りたる四五人の負傷者に、是非中尉殿を助けて、綱帶所まで送りくれよと頼んだ。而して彼は予の顔を覗き見るやうにして、

『中尉殿、私の傷はたいした事でも無いやうですから、未だ後へは退りませぬ。中尉殿の傷は重いのですから、御纏を大切に、良くなつて下さる。』

近藤去る

予は彼と握手して其熱き義侠に感謝することを得たか、否能はざりき。予は彼に接吻して、汝健康なれよと祈ることを得たか、嗚呼予は能くせざりき。唯だ予は心中無限の感謝を以て、彼の恩義に泣いた。而して彼の健康ならんことを念じた。一樹の蔭、一河の流、皆是れ他生の縁なりとは云へ、自から好んで身を釜中に投じ、萬死の予を救うて敵陣を脱せしめたる彼は、實に予が再生の恩人である。予が今日ある所以のもの、決して予が自身の生命には非らず、先の予は既に望臺に命を預して、今の予は即ち近藤竹三郎の化身ならずや。嗚呼、彼れ近藤竹三郎は、これより後一ヶ月ならずして、戦死を遂げたるなり。嗚

近藤は死せり

呼、彼は幽魂既に遠く去りて、其千辛萬苦の餘に救ひ出したる予の今日あるを見る能はざるなり。想ふて此處に到れば、予は泣かんと欲して聲を成さず、語らんと欲して辭を成さざるなり。

此夜、暗中を利用して敵前を忍びつゝ、四五人の傷兵は、予を昇いで綱帶所を捜り索めた。予は猶ほ氣が遠くて、殆ど夢心地でゐたから、何事も能くは覺えぬが、たゞ途中で今まで運ばれて來た儘に、擔架に移し載せられたことだけを記憶してゐる。而して遂に忙がはしく人の馳せ廻る地點へ据え置かれた。これを實に綱帶所であつた。斯くと知つた予は思はず、

綱帶所に来る

『安井君はゐるか？ 安藤君は？ …』
と叫んだ。すると、

『あれが安藤だ！ 安井も居るぞ！』

安井君！ 安藤君！

と乍ら答へた。予は兩氏の此處にあるべしと素より承知してゐたので無く、只だ夢中で、慕はしき兩氏の名を叫んだのに、淺からぬ生死の契の糸は、予を茲に導き寄せ、離合集散常無き習の戰場に在つて、圓らざりき、今は此兩軍總の手によつて救護せらるゝに至つた

のである。嗚呼、天は實に不思議の邂逅を予等に許したのである。予は思ひ掛無くも二氏の聲を聞いて、胸が迫まつた。

『安井君！安藤君！』

兩軍醫は予の手を取り、予の額を撫て、

『能くやつた……能くやつてくれた……』

見れば予の大隊長上村少佐（長治）の死屍も我が左方に横たはつてゐた。少佐は第一散兵隊を攻撃する時に、最先頭に立ちて予等を激勵してゐたのに、今や魂無き骸となつて、安く此に眠り、其従卒は其屍を擁して、弾の限りに泣き喚いてゐた。予はやがて縛帯を受けて、後方へ送り返された。折角不思議に廻り合つた兩軍醫と、云ふに云はれぬ辛さ別れをなして……

後日安井軍醫に逢つた時に、彼は予を收容したる當時の状況を語つて斯く云つた。

『假縛帯所の位置は、我隊の傷兵の來るべしと豫想せられた處で無いのに、君を救ひ得たは、實に不思議中の不思議であつた。歸り來つた負傷者に、君の安否を尋ねたれば、誰しも皆、多分戦死したのだと答へ、中には鷄冠山の鐵條網下で戦死してゐたと答ふるも

上村少佐の遺骸

不思議の救

迎も助からぬと思つた

近藤の最期

のもあつた。されば君は最早生きては還らぬ者と思つたが、切めては死骸だけなりとも拾はねばと、様々と君が何處に墜れてゐるかと捜したけれども、更に知れず。其内、定岡と云ふ軍曹が戻つて來たので、又た君の事を問ふたれば、鷄冠山の地隙に死んでゐたと答へたから、早速看護手を督して、擔架を以て迎へにやつたけれど、暗さは暗し、剩さへ敵彈猶ほ烈しくして進み行く事が出来なかつた爲、空しく途中から引返して來た。されど打棄てはあかれぬと、又たもや擔架を送りたれば、思ひがけ無くも、猶ほ命ある君を載せて歸つたので、予等の喜びは那計りであつたか。されど一見して、君は最早數時間の後に絶息するなるべしと思はれたので、安藤軍醫と顔を見合せたのだ。だから君を野戦病院へ送つた時には、予等は暗に君と長の暇乞をした積であつた……

扱て予は其後、君を救つた近藤竹三郎なるものを見た。然るに何たる不思議の因縁なるか。彼時より殆ど一ヶ月程後の事、或日一人の兵卒が、圓匙を肩にして、予等の縛帯所の側を通つてゐると、乍らバツリと仰向に仆れた。予は直ちに走り寄つて見たれば、彼こそ君を敵圍から救出した近藤竹三郎であつたぞ！予は君を救つた人だと思へば、懐しくもあり、又た可哀相でもあり、虫の息になつてゐたから、予が懐なる水筒の水を

飲ませたれば、彼は微笑を洩したまひ、安らかに絶命したるぞ……』
嗚呼、予が再生の恩人たる近藤竹三郎其人は、如斯くにして、其貴き生命を流暉の爲に
殞したるなり！

開城の喜報

第一回總攻撃は、如斯き慘烈を演じて、其局を結んだのである。二回三回と重ねたる總
攻撃も亦た慘烈の極なりしなり。されど我軍は毫も之に屈せず、益々銳氣を鼓し、愈よ手
段を盡して、死守の強敵を攻めに攻めて、遂に之を攻め抜いた。予は第一回總攻撃後の旅
順攻圍に就いては、之を語り之を筆にするの權限を有せず。之を語らん事、必ずや他に其
人があるであらう。實に予は其後病床に在りし事殆ど三百日、手は動かさず、足は立たず、
痛苦の裡に、只だ遙かに思を遼東に馳せて、忠勇なる將卒が陣頭の武者振を夢想するのみ
であつた。然るに時も折も折、明治三十八年の初春を迎へた第二日、蘇士以來第一の
堅城と唱へられたる旅順大要塞——露國が東亞侵略の策源地と頼んだ此地は、遂に長く皇
軍の猛威を支ふること能はずして開城し、守將自から出て、乃木將軍の旗下に命を乞ふに
至つた。此報を得た予——否、予のみならず、苟くも攻圍軍に参加した凡ての負傷者は、

喜ぶと云はんよりは、寧ろ泣いたのである。旅順の山谷に埋めた我軍勇士の白骨も、此時
起つて舞躍せしならんか。『仇を……』と叫び、『旅順が……』と呼び、無限の怨を含
んで墜れたる忠義の靈魂も、必ずや茲に初めて其の安慰を得たるならんか。

予は旅順開城の報を聞くや、喜び極まつて泣きたり。而して又々陣歿したる幾多の戰
友を想ひ起した。嗚呼、武運拙くして、多數の部下を戰場に殺したる予は、如何にして、
其忠魂に謝することが出来やうか？幾多の同胞を棄て、只だ獨り救はれて歸りたる予は、
何の顔あつてか、父老に見ゆることを得べきか？

嗚呼、今や戦は休みぬ、風は静まりぬ。勇士の血は此平和を購ひたり。夫れ旅順の山
竟に夷かなるの秋あらん、遼東の河竟に涸るこの時あらん。されど君に謁し、國に殉じた
る幾萬の忠將義卒の名は、千歳に芳しく、萬世に輝き、後昆は永遠に其勳績を傳へて遂に
忘るゝの時や無からん。
(をほり)

わが大君、ものなまほし、ことしあらば、
火にも水にも、われなけなくに。

明治三十九年四月二十日印刷
明治三十九年四月廿五日發行

不許
複製

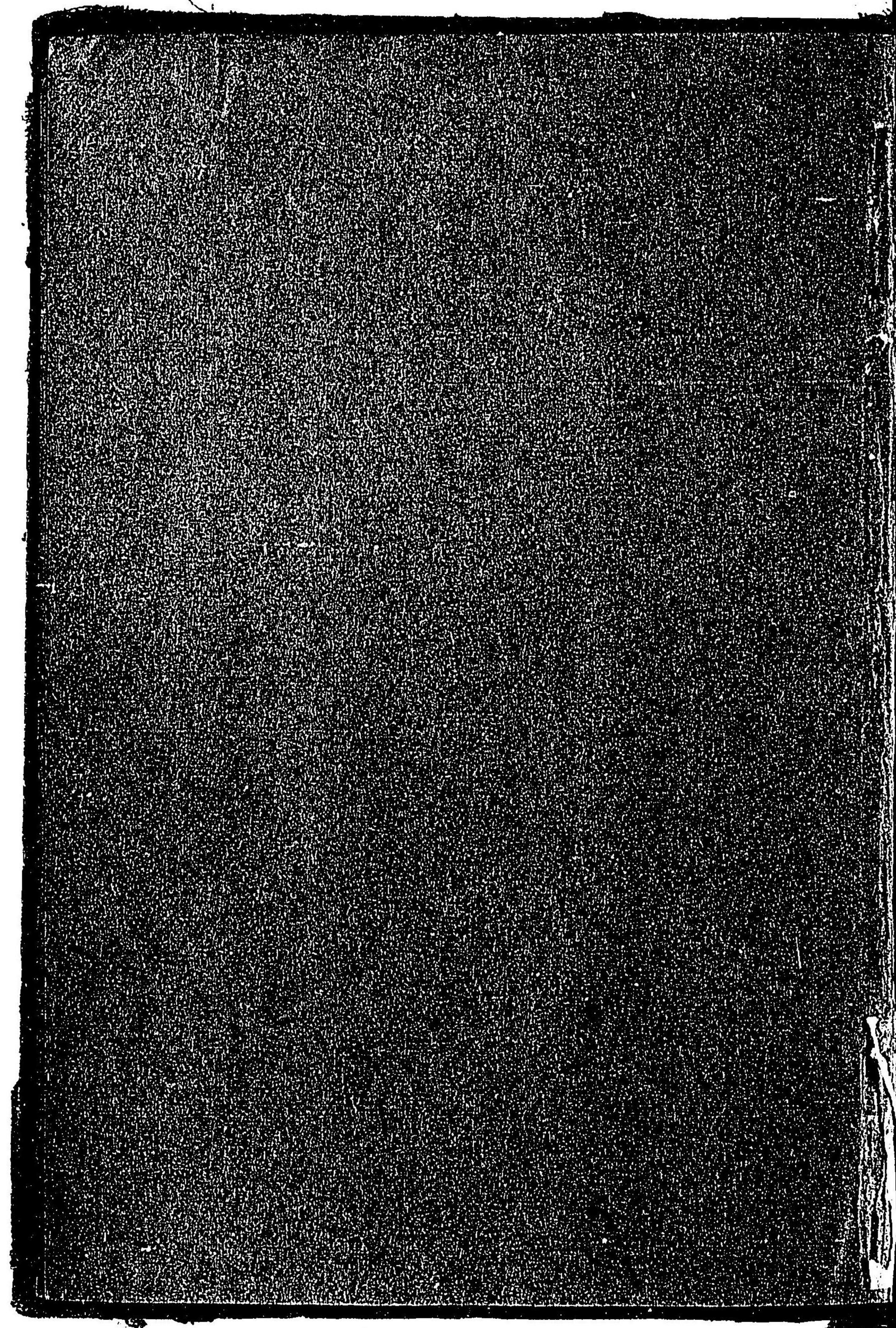
著者
發行者
印刷者
印刷所
發行所

肉
定價金七拾錢

東京市麹町區三番町八十三番地 櫻井忠温
東京市麹町區一番町二十八番地 後醍院頼誠
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 青木弘
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式会社秀英舎第一工場
東京市麹町區五番町十六番地 英文新誌社出版部

東京發賣元

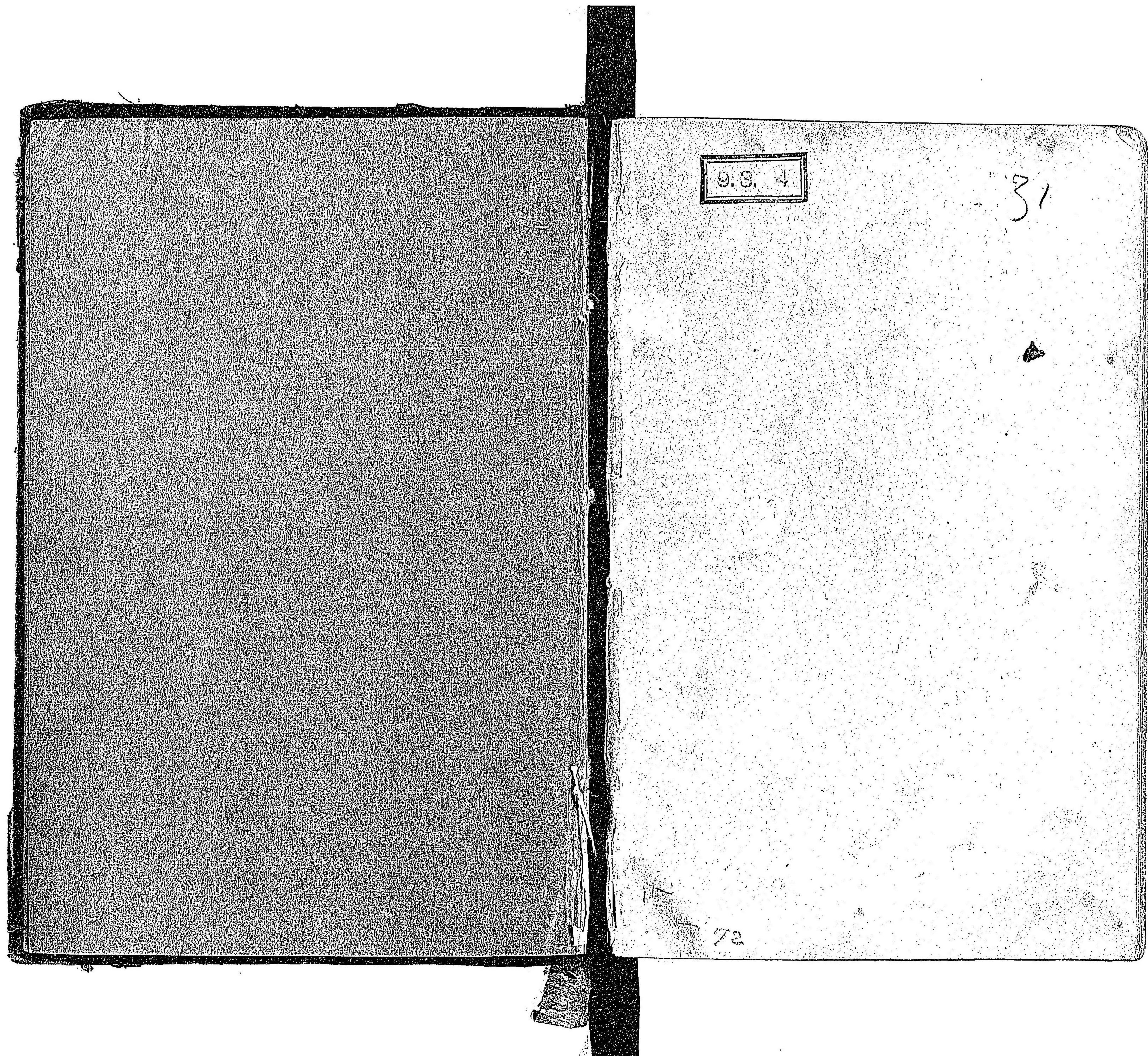
東京 上田 明海 隆
東京 良明 隆
東京 東隆 館



9.3.4

31

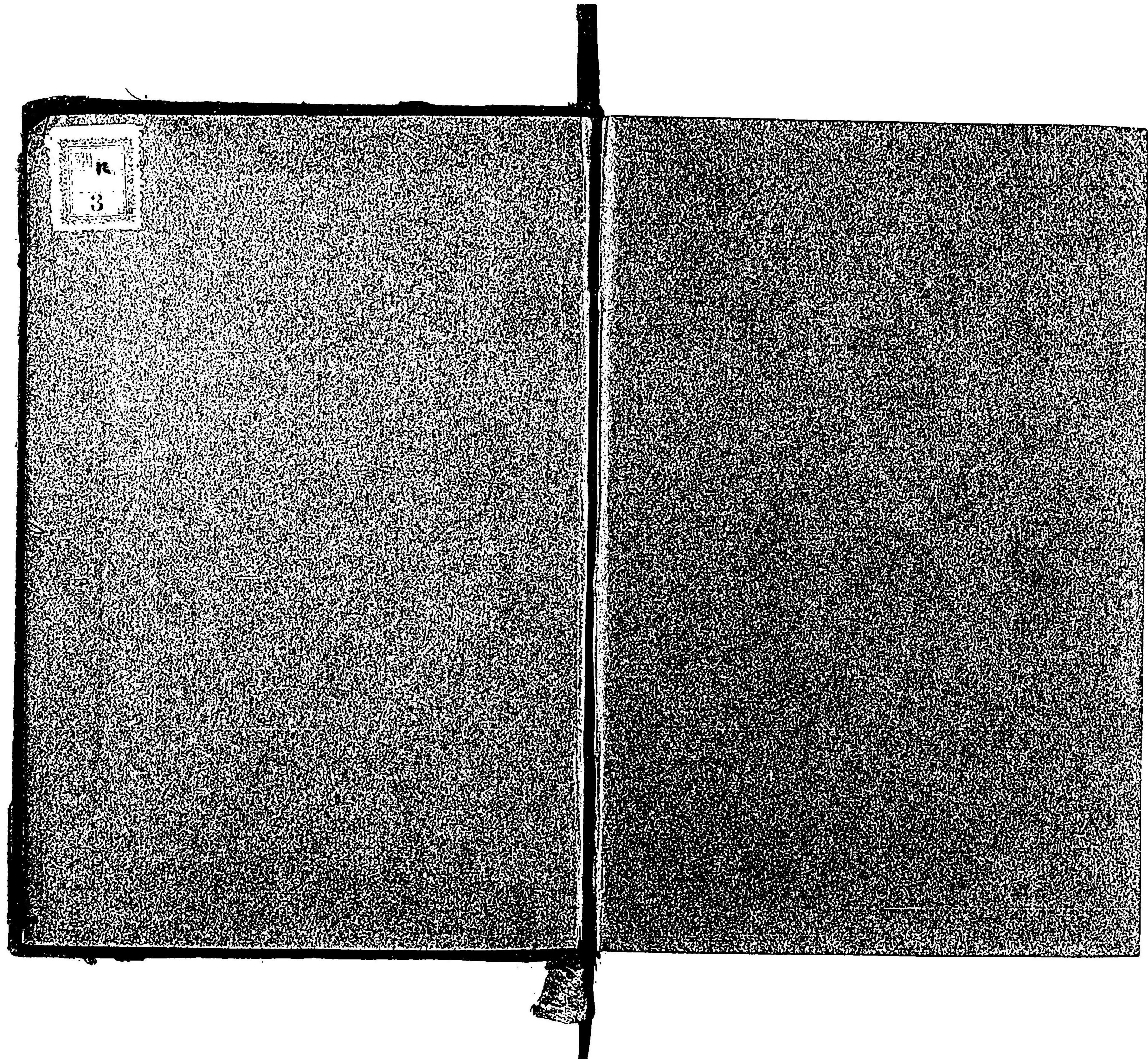
72

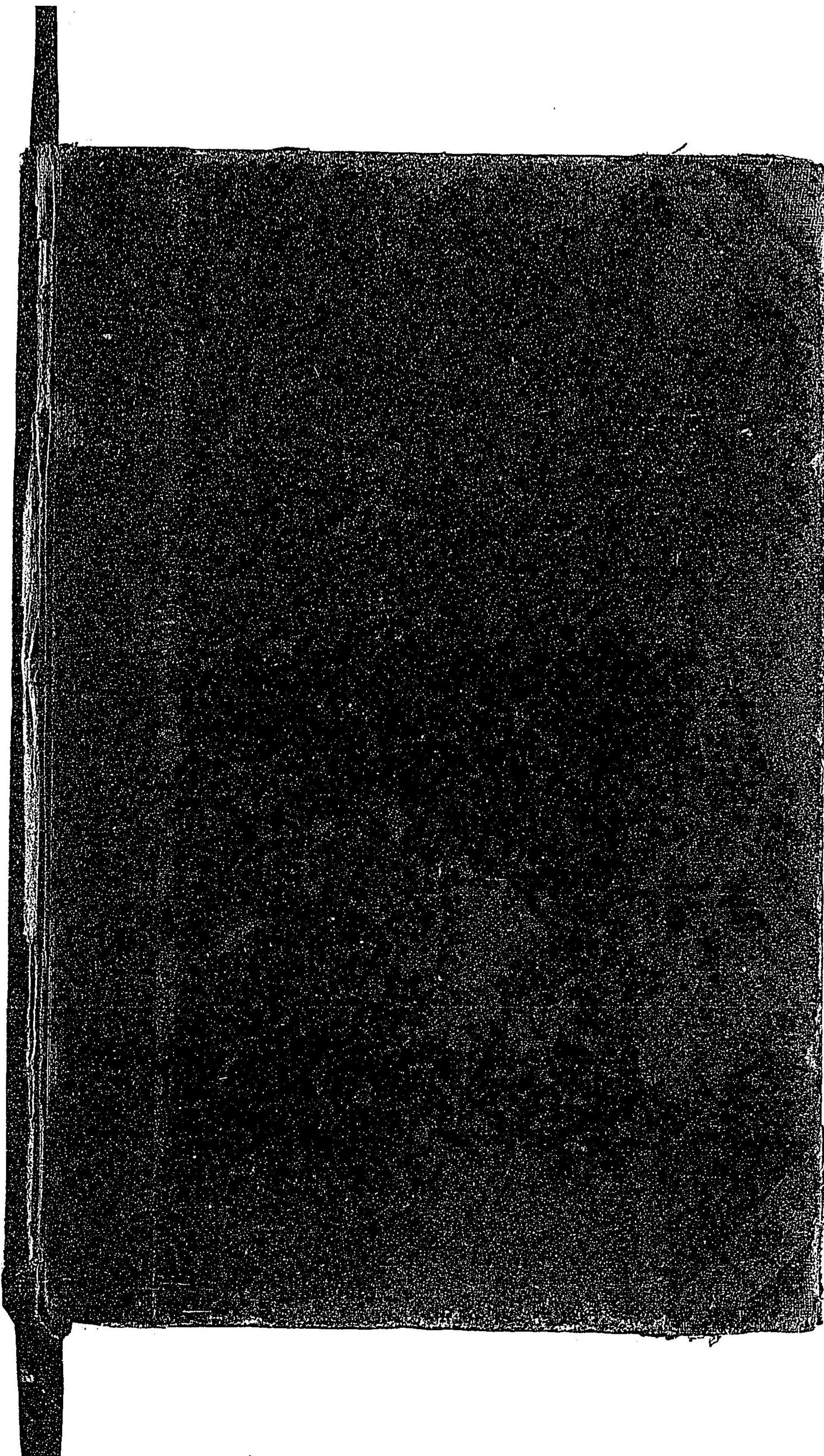


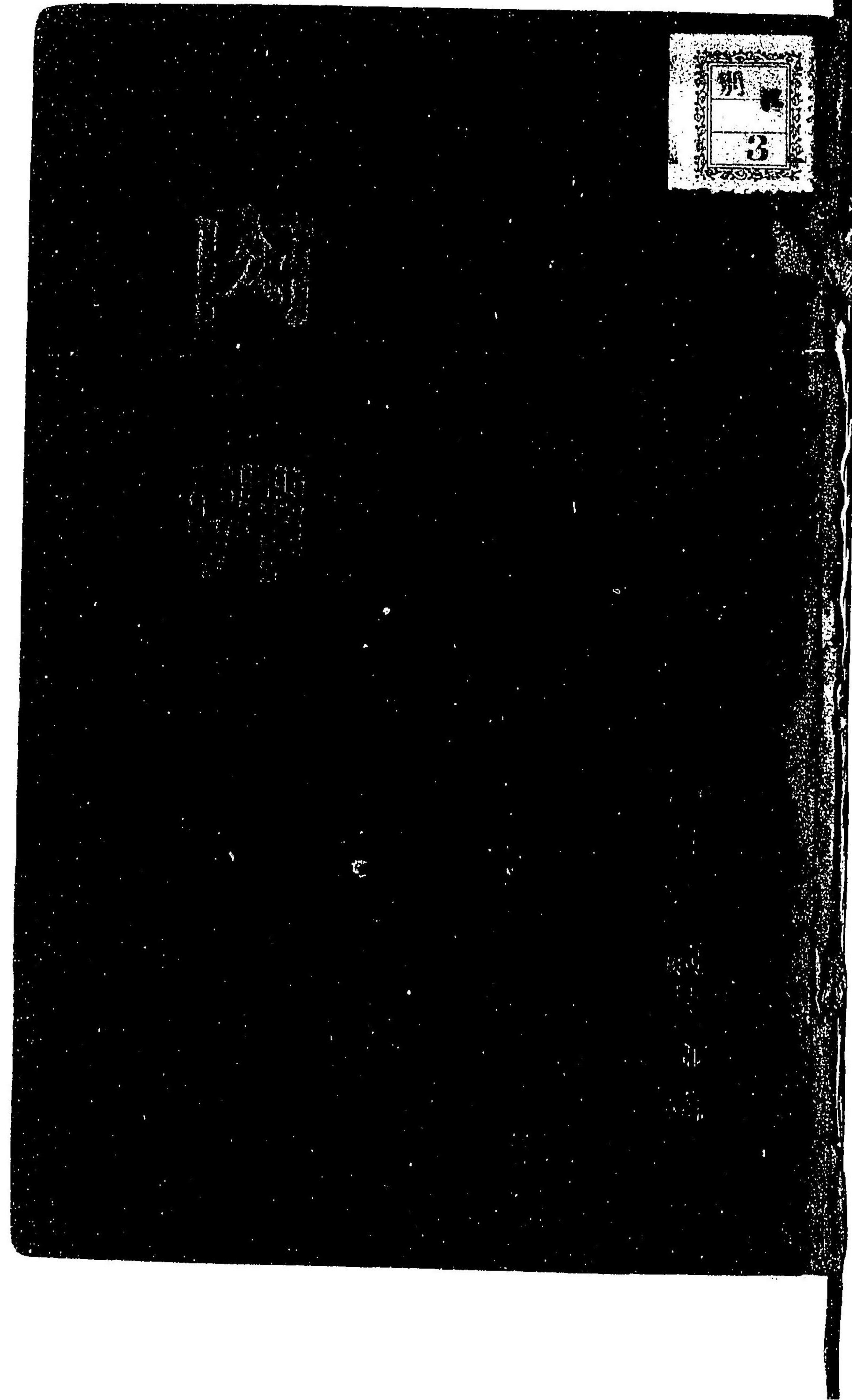
9.3. 4

31

72







301734000-5

別に-3

肉弾

桜井 忠温 / 著

M39

ACB- 32



折からの雨

陵水河子の畑地に、形ばかりの祭壇を設けられた。名は祭壇なれど、實は土民の家の庭に据ゑてあつた机を用ゐたもので、上には白き布を敷き、布教師が持合の阿彌陀佛の畫像を祭つて、其前には四寸角ほどの箱に納められた遺骨を幾つも積み重ね、又た焼香の備もしてあつた。其祭壇は又た丁度旅順の方向に面せられてあつた。薄暗き蠟燭の光は物悲しげに、遠近の虫の音は無常を告ぐるが如く、折しもあれや揚柳の枝を梳づりて静かに降り渡ぐ村雨は、一入の哀れを増した。師團の各將校は祭壇前に環形を成して整列し、兵卒は其後に立ち、布教師の讀經が終ると、師團長は静かに進み出て、香を焼き、恭しく禮拜し、雲時は頭を擡げられ無かつたは、定めし無限の悲愁と感謝の念とが、其胸裡に往來してゐたのであらう。口の中では『能くやつてくれた！』と念じてゐられたことであらう。亡き人も心あらば、此將軍の麾下を離れたことを悲み嘆いたらう。又た次ぎ／＼に焼香する將卒が心中の情や云ふべからず、我が部下の靈を祀る中隊長や小隊長の思ひや如何に？花々しく戰つてくれた、それこそ日頃教育した効はあれ、能く汝の本分を盡くしてくれた、能く陛下の股肱たる精神を貫いてくれたと嘆きの中にも感謝してゐたらう。入營以來同じ枕に寝ね、同じ務に勵みたる兵卒等は、故友が健氣の最期を羨み、自から死後れたるを嘆じたてもあらう。祭壇に額突く將卒の袖に宿した露は、空の村雨の降りかゝるのみでも無かつた。

戦死者忠魂碑と記された紀念の標の前に額突く戦友等が、鐘詰の殺に青き草葉を差して手向となし、又た水筒の水を注いだ其のやさしき心根！中には『戦死の魁』など云ふ文字を記して供へたものもあつた。かく厚く弔はれて、亡き魂も嘸や嬉しく感動したことであらう。